

339
876



始





千葉縣農業要覽

339-876



大正五年三月

本編は最近に於ける本縣農業の概況を
記述せるものなり

千葉縣内務部



目次

一、地理

(イ) 地勢……………一

(ロ) 面積……………二

(ハ) 土質……………三

(ニ) 氣候……………八

二、土地

(イ) 耕地の面積並地價及賣買價格……………一〇

(ロ) 自作地と小作地……………一一

目次

(ハ)	水田利用の状況	二
(ニ)	土地改良の状況	一七
(ホ)	牛馬耕普及の状況	一九
(ヘ)	田畑所有者別	二一
三、農家		
(イ)	農家戸數及農業人員	二六
(ロ)	自作者と小作者	二六
(ハ)	農家耕作地の廣狹	二九
(ニ)	農家一戸に對する耕地反別	三〇

(ホ)	農事教育を受けたる人員	三二
四、農作物		
(イ)	稻	三三
(ロ)	麥	三五
(ハ)	粟	五一
(ニ)	黍	六二
(ホ)	蕎麥	六四
(ヘ)	玉蜀黍	六五
(ト)	大豆	六六
目次		六八

(チ)	小豆	七〇
(リ)	落花生	七一
(ヌ)	特用作物	七七
	一、葉煙草	七八
	二、菜種	七九
	三、花百合	八一
(ル)	種苗類	八二
(オ)	綠肥作物	八四
(ワ)	茶	八六

(カ)	蔬菜類	八八
	一、甘藷	八八
	二、馬鈴薯	九二
	三、里芋	九四
	四、蘿蔔、胡蘿蔔	九六
	五、牛蒡	九八
	六、蓮根	一〇〇
	七、葱	一〇二
	八、蒨類	一〇四
	九、南瓜	一〇五

一〇、西瓜	一〇七
二、瓜類	一〇九
三、茄	一一一
三、其他の蔬菜	一一三
四、促成栽培	一一五
(ヨ) 果樹類	一一七
一、梅	一一八
二、桃	一二〇
三、梨	一二二
四、柿	一二四

五、農業上の施設

五、枇杷	一二七
六、葡萄	一二九
七、柑橘	一三〇
八、栗	一三三
(イ) 害虫驅除豫防	一三五
(ロ) 水稻採種田	一三八
(ハ) 縣立農事試験場	一四二
(ニ) 米穀検査所	一四三
目次	七

(ホ)	縣農會	一四八
六、金 融		
(イ)	農工銀行	一五一
(ロ)	産業組合	一五二
(ハ)	金利	一五三
(ニ)	貯金	一五七
七、肥 料		
(イ)	管内肥料製造高	一六〇
(ロ)	肥料消費額	一六五

八、農家副業		一六六
(イ)	澱粉	一六七
(ロ)	藁製品	一六九
(ハ)	疊表、莫産類	一七〇
(ニ)	大根切干	一七一
(ホ)	揚子	一七一
(ヘ)	團扇骨	一七二
(ト)	箆、籠類	一七二
(チ)	箕	一七三
目次		九

(リ)	菅笠	一七三
(ヌ)	玉藍	一七三

一、地 理
(イ) 地 勢

本縣は本州中區の東端に位し東西に狭く南北に長く遠く外海に突出し安房、上總、下總の三ヶ國より成り半島狀にして之を十二郡三百四十九ヶ町村に分割し東西凡二十四里、南北凡三十二里其の面積三百四十四方里餘にして三府四十三縣中第二十六位に居れり安房、上總の二國は概して山地多く特に總房の國境には高峰峻嶺蜿蜒數里に亘り平地を見ること稀なり然れども是等山岳起伏の間は内灣及太平洋に注ぐべき河川の流域にして地味肥沃に且つ運輸灌漑の便亦開けたり、下總六郡は概ね平地にして其間には印旛、手賀、栗山等の大小湖川各所に散布し僅に東南部

本縣内耕地の最大面積を占むる土質は第四紀古層にして第四紀新層之に亞ぎ第三紀層は僅に安房國及上總國南部に於て數方里の耕地を構成するに過ぎざるなり今地質系統により縣下の土壤を類別すれば次の如し

四

- 第一 第三紀層埴土
- 第二 第四紀古層埴土
- 第三 第四紀古層埴質壤土
- 第四 第四紀新層埴質壤土
- 第五 輝綠岩質凝灰岩埴質礫土
- 第六 第四紀古層壤土
- 第七 第四紀新層壤土
- 第八 第四紀新層砂質壤土
- 第九 第四紀新層壤質砂土

- 第十 第三紀層砂土
- 第十一 第四紀新層砂土
- 第十二 第四紀新層砂質礫土

而して以上十二種の土壤中第四紀古層に屬するもの最大面積を占むるを以て隨て耕地の多くは地味概して肥沃ならず、更に此等の土性に付少しく細説すべし
火成岩地は房州嶺岡山脈に散見し其面積十數里にして縣下の一小部分を占むるに過ぎず今輝綠岩質凝灰岩土壤の理學的性状を見るに此土層は表面沈定し密なる状態に於て土中水分の飽和最高度に達し然も猶大氣流通の餘裕あり且つ此土壤は原土百分中四六%内外の石礫を含有するを以て土壤の理學的性状は良好なり又其の化學的性状を見るに強鹽酸に依る溶解物多量にして磷酸石灰等の含量は普通なれ

五

ども加里の含量は少量なり而して磷酸の吸収力は稍大なるも窒素の吸収力は微弱なり

六

古生紀岩層は海上郡銚子半島の一隅に現出すれども其面積は僅少にして之が土壤を構成するものなし

第三紀層地の土性は埴土にして安房國及上總國南部に於ける耕地の大部分を占め其面積多大なり又下總國及上總國長生、市原郡等の台地の下層は殆ど皆此系統より成るが如し今此土壤に就て一二の例を見るに安房郡瀧田村下瀧田の土壤は加里、磷酸等の含量乏しきも窒素磷酸の吸収力は共に高度なり又其理學的性狀を見るに土層粗密の如何を問はず孰れも猶大氣の滲透する餘裕ある故、此土壤は植物

養料の缺乏を吸収力の利用に依り改良するを要す又君津郡駒山村志駒の土壤は埴土にして加里、石灰の含量多きも磷酸の含量は僅少なり而して窒素磷酸の吸収力は共に高度なり、其理學的性狀は土層沈定し密なる状態に於ては容水量の外に大氣を滲透せしめざるを以て農耕上甚だ不利なるが故相當の改良を施すこと必要なり

第四紀古層地は本縣下土質の最大面積を占め縣下の主なる原野は皆此地層に屬す而して其表土は殆ど皆腐植質物を多量に含有すれども其下層土は赤黄色を帯びたる埴土或は埴質壤土にして有機物に乏しく加里石灰等の含量は普通なれども磷酸は少し而して窒素磷酸の吸収力は強大なるが故に此土質に屬する耕地は此等の吸

七

收力を利用して養料の缺乏を防ぐべし

第四紀新層地は第四紀古層に亞ぎ廣大なる面積を占め本縣下土壤中最も殖産力の強大なる土壤なり而して植物養料の含量は比較的少量なれども窒素、磷酸の吸収力は共に稍微弱なり然れども一二の個所を除けば其土層沈定して密なる状態に於て大氣を滲通せしむる餘裕あるを以て農業上頗る良好なる土壤なり

(二) 氣候

本縣の氣候は概ね和煦にして寒暑に偏せず、雨量に富み植物の發育佳良なり
氣温は常に安房及上總、下總國太平洋沿岸に高く、下總の北部内陸に低く、其の最も高温なるは安房郡富崎村より、白濱村に至る地方にして、年平均華氏六十一

度内外なり、最も低温なるは房總の山間部及下總北部地方にして華氏五十七度を下れり、又最高温度の年平均も安房郡北條町地方に高く、最低温度の年平均は内地及山間部に於て低く華氏五十度を下ることあり、而して晝夜寒暖の差は東海岸に赴くに随ひ少なく、内地に入るに及ひ多し、雨量は前記の如く一般に多きも殊に房總山間部及夷隅、安房郡の沿岸に多量にして下總の内陸に至るに随ひて少し、降雪は頗る少く、其の日數も亦僅に十日を出つること稀にして、十二月下旬より三月中旬の間なりとす、降霜は地方に依り時期頗る區々たるものあれども初霜の早きは十一月中旬頃にして晩霜は四月中旬迄なり

二、土地

(1) 耕地の面積並地價及賣買價格

(大正三年十二月末日現在)

郡名	耕地面積		合計	平均一反步當地價			
	田	畑		田	畑	田	畑
安房	八、九三六五	四、九三八八	一三、八七五三	三七八六〇	一、四三〇	二〇〇、〇〇〇	七五〇〇〇
夷隅	七、一〇九三	三、七五二五	一〇、八六一八	三一〇七〇	一〇、五七〇	一四〇、〇〇〇	六一〇〇〇
君津	一三、〇六八七	五、四二三八	一八、四九二五	三三八八〇	一〇、七三〇	一二〇、〇〇〇	五〇〇〇〇
長生	八、九五九七	五、七七七三	一四、七三七〇	二九三六〇	九、九二〇	一三〇、〇〇〇	六五〇〇〇
山武	一、二八一	八、九二一五	一〇、一〇二六	二七三四〇	九、二六〇	八〇、〇〇〇	四〇〇〇〇
市原	七、二七〇三	四、六八四八	一一、九五五一	三一〇三〇	九、六一〇	七七〇〇〇	二五〇〇〇
千葉	三、七八八三	七、二四二四	一〇、〇三〇七	三五七五〇	八、九六〇	八〇、〇〇〇	六〇〇〇〇

郡名	耕地面積		合計	平均一反步當地價			
	田	畑		田	畑	田	畑
東葛飾	九、七六八三	一一、〇八四七	二一、八五三〇	三〇、八〇〇	八、八八〇	一七〇、〇〇〇	一二〇、〇〇〇
印旛	一〇、三三〇三	一一、八二五七	二二、一五六〇	三一、二八〇	七、七〇〇	一〇〇、〇〇〇	五五〇、〇〇〇
香取	一六、二二二六	七、七〇一三	二三、九三三八	三三、〇二〇	九、八〇〇	一一一、〇〇〇	六〇〇、〇〇〇
海上	三、四八一七	三、七七一三	七、二五二九	三一、五二〇	八、七二〇	一四〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
匝瑳	四、一二八三	二、九三三五	七、〇六一七	二七、三九〇	八、一八〇	一五〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇
合計	一〇五、二二五〇	八〇、〇五七四	一八五、二八二四				

(ロ) 自作地と小作地

最近十ヶ年間に於ける自作地と小作地との割合を見るに明治三十九年頃迄は自作地の割合漸次遞減したれども其後數年間は全く反對にして次第に増加し更に大正

二年よりは減少の傾向を示すに至れり
今之が狀況を表示すれば次の如し

年次	耕地總作付面積ニ對スル自作地ノ割合%	同上小作地ノ割合%
明治三十八年	五一・二九	四八・七一
同三十九年	五〇・八五	四九・二五
同四十年	五〇・八八	四九・二二
同四十一年	五一・〇七	四八・九三
同四十二年	五一・三〇	四八・七〇
同四十三年	五一・四八	四八・五二
同四十四年	五一・〇一	四八・九九
大正元年	五一・三四	四八・六六
同二年	五一・二七	四八・七三

同 三 年

五一・〇〇

四九・〇〇

更に大正三年十二月末日現在各郡に於ける自作地と小作地との割合を示せば次の如し

郡名	耕地作付總面積 町	自作地面積 町	小作地面積 町	自作地割合 %	小作地割合 %
安房	一三、八七五三	一〇、〇五二七	三、八二二六	七二・四五	二七・五五
夷隅	一〇、八六一八	五、九三二七	四、九三九一	五四・五三	四五・四七
君津	一八、四九二五	一〇、二五四五	八、二三八〇	五五・四五	四四・五五
長生	一四、七三七〇	八、〇九二七	六、六四四三	五四・九一	四五・〇九
山武	二二、一〇二六	一〇、八三四五	一〇、二六八一	五二・五五	四七・四五

合 計	市 原	千 葉	東 葛 飾	印 旛	香 取	海 上	匝 瑛
	一一、九五五・一	四、六五〇・五	四、九九七・一	九、九九一・二	一〇、〇一九・八	一〇、九二八・八	四、〇一八・一
一一、〇三〇・七	七、三〇四・六	六、〇三三・六	一一、八六一・八	一三、一六二・二	一一、九八五・〇	三、二三四・八	二、二五二・九
二、八五三・〇	三、八九〇	四、五三〇	四、五七三	四、三三一	四、五七〇	五、五四〇	七、二五二・九
二、一三六・〇	四、六六一・八	六、九四四	五、五七〇	五、五七〇	五、五七〇	五、五七〇	七、二五二・九
二、三、九一三・八	三、八六一・八	六、九四四	五、五七〇	五、五七〇	五、五七〇	五、五七〇	二、三、九一三・八
二、三、一三六・〇	三、八六一・八	六、九四四	五、五七〇	五、五七〇	五、五七〇	五、五七〇	二、三、一三六・〇
九四、六六六・一	九〇、六六三	五、一〇〇	四、九〇〇	四、九〇〇	四、九〇〇	四、九〇〇	九四、六六六・一

即ち前表に依れば自作地の割合、平均より少きは市原、千葉、東葛飾、印旛、香取の五郡にして特に市原郡に於て最も少し

(ハ) 水田利用の状況

本縣の水田には濕田多くして二毛作以上の利用をなし得るもの少く水田總面積に對し僅に六分八厘餘に過ぎざれども將來耕地整理其他土地改良行はるゝに従ひ漸次之を増加せしむることは蓋し難事にあらざるなり
最近の統計により各郡に於ける一毛作田地及二毛作以上田地の割合を示せば次の如し

郡 名	水田面積	一毛作田地	二毛作以上田地	二毛作田地割合
安 房	八、九三六・五町	八、〇五二・五町	八八四・〇町	九・八九%

郡名	耕地整理地区面積	野合計	耕地總面積
夷隅	七、一〇九・三	四三八・三	六・一六
君津	一三、〇六八・三	四、三九七・三	三三・六五
長生	八、九五九・七	二〇一・三	二・二五
山武	一一、一八一・一	一四・七	〇・一一
市原	七、二七〇・三	七九三・三	一〇・九一
千葉	三、七八八・三	五七・一	一・五一
東葛飾	九、七六八・三	二五・九	〇・二七
印旛	一〇、三一一・三	四八・一	〇・四七
香取	一六、二二二・六	二〇四・二	一・二六
海上	三、四八一・七	一六五・七	四・七六
匝瑳	四、二八二・二	一・五	〇・〇四
合 計	一〇五、二二五・〇	七、二二一・三	六八・七

右現今二毛作實施田地の外勞力の不足、用水の不便或は慣習上より二毛作適地に
して而かも實施せられざる面積各郡を通じて約九千町歩、更に耕地整理其他土地
改良に依り二毛作適地に變更し得らるべき面積一萬一千餘町歩あり

(二) 土地改良の狀況

本縣に於ける耕地整理は治明三十四年以降の實地に係り近時著しき發達を示せり
今大正三年十二月末日現在耕地整理施行地區の面積を示せば次の如し

郡名	耕地整理地区面積		野合計	耕地總面積
	田	畑		
夷隅	七、一〇九・三	四三八・三	四三八・三	六・一六
君津	一三、〇六八・三	四、三九七・三	四、三九七・三	三三・六五
長生	八、九五九・七	二〇一・三	二〇一・三	二・二五
山武	一一、一八一・一	一四・七	一四・七	〇・一一
市原	七、二七〇・三	七九三・三	七九三・三	一〇・九一
千葉	三、七八八・三	五七・一	五七・一	一・五一
東葛飾	九、七六八・三	二五・九	二五・九	〇・二七
印旛	一〇、三一一・三	四八・一	四八・一	〇・四七
香取	一六、二二二・六	二〇四・二	二〇四・二	一・二六
海上	三、四八一・七	一六五・七	一六五・七	四・七六
匝瑳	四、二八二・二	一・五	一・五	〇・〇四
合 計	一〇五、二二五・〇	七、二二一・三	七、二二一・三	六八・七

海	香	印	東	千	市	山	長	君	夷	安
上	取	旆	葛	葉	原	武	生	津	隅	房
一、二〇・七	一、六九〇・〇	一、〇四一・〇	二、一八二・一	一、三一・八	七二・八	二、六五七・三	三、三三三・五	一、一一一・七	三、九四一・一	一、七七・八
三、七〇	二、二三・六	四、二六・八	四、三八・二	一、一〇	一、四一	一、三一四・四	五、三三・九	三、八三・六	一、八三・〇	二、六・一
	一、三〇・四	四、八二	二、二八二			一、九九七	四、七一	七、六	六・二	四・一
一、五七・七	二、〇四四・〇	一、五一六・〇	二、八四八・四	一、四二・八	八、六・九	四、一七一・四	四、三四・五	一、五〇二・九	五、八三・三	二、〇八・〇
二・一七	八・〇〇	六・三四	一、一九九	一・二九	〇・七三	一、八八二	二・六三	八・〇九	五・三一	一・四八
										一八
										%

合	匝
計	礎
九、九九三・三	八〇・五
三、三一九・九	八・二
六、七一・四	
一三、七八四・六	八八・七
七・〇八	一・二六

即ち總耕地の中耕地整理地區其の七分八毛を占め各郡中最も多きは山武郡の一割一分九厘九毛にして最も少きは市原郡の七厘三毛とす

(ホ) 牛馬耕普及の状況

本縣の耕地は前記の如く二毛作適地少きと共に亦畜耕に適する水田多からず而かも畑地に於ける畜耕尙甚だ幼稚にして未だ一般に牛馬耕の普及周からず今最近に於ける調査に依り各郡牛馬耕實施反別の割合を示せば次の如し

郡名	牛馬耕ヲ爲ス反別		耕地總反別 對實施牛 馬耕ノ割合%
	田	畑	
安房	六、八〇一・四	一、九七八・五	八、七七九・九
夷隅	五、八五六・二	一、五〇二・五	七、三五八・七
君津	五、二〇七・四	二、一四九・三	七、三五六・七
長生	三、七六五・二	二、二二〇・〇	六、二八五・二
山武	八八一・一	五八五	一四六・六
市原	三、六〇二・五	一、五三三・七	三、七五六・二
千葉	一〇〇・〇	二五・五	三五・五
東葛	二九〇・二	四三七・三	七二七・五
印旛	二〇三・九	二七九・〇	四八二・九
合計	三、七二一・四	一、一四一・一	四、八六二・五

即ち現在の耕地總反別に對し牛馬耕實施反別は二割一厘九毛に過ぎざるなり

（へ） 田畑所有者別

香取	海上	匝	合計
一五八・〇	五三九・八	三三七・〇	一〇、一三九・一
三四三・七	一、三四二・七	七九二・八	三七、四〇八・四
一、四四	一八・五一	一一・二三	二〇・一九

一町村内に於ける田畑にして之が所有者の自町村住民なると他町村住民なるとは其の町村の貧富並は經濟狀態を推定するの一要素となるべし
 今大正四年八月一日現在を以て縣下各町村に亘りて調査したる自町村住民の所有

する田畑反別及他町村住民の所有する田畑反別との割合を郡別に表示すれば次の如し

郡別	田畑反別	自町村住民ノ所有スル田畑	同上割合 %	他町村住民ノ所有スル田畑	同上割合 %
安房	一三、八九九・四	一三、一六六・三	九四・七三	七三三・一	五・二七
夷隅	一〇、九三六・七	九、八一五・三	八九・七五	一一、二一・四	一〇・二五
君津	一八、二四六・五	一六、三四〇・六	八九・五五	一、九〇五・九	一〇・四五
長生	一五、〇九五・〇	一三、七五一・九	九一・一〇	一、三四三・一	八・九〇
山武	二〇、七三四・六	一八、七三五・九	九〇・三六	一、九九八・七	九・六四
市原	一一、八七九・七	一〇、五五九・六	八八・八九	一一、三三〇・一	一一・一一
千葉	一〇、七八二・八	九、四五三・四	八七・六七	一一、三三九・四	一一・三三

東葛	印旛	香取	海城	匝瑳	合計
二〇、六三三・五	二五、〇五四・三	二三、一四三・六	六、九八七・四	七、〇七一・六	一八四、四六五・〇
一七、三七三・四	二一、一〇五・一	一九、七四〇・二	五、七九九・四	六、〇四三・六	一六一、八八四・七
八四・二〇	八四・二四	八五・二九	八三・〇〇	八五・四六	八七・七六
三、二六〇・一	三、九四九・一	三、四〇三・四	一、一八八・〇	一、〇二八・〇	二二、五八〇・三
一五・八〇	一五・七六	一四・七一	一七・〇〇	一四・五四	一一・二四

更に此の割合を田畑地價に依りて見るときは次表の如し

○田畑地價より見たる所有別表

郡別	田畑地價總額	自町村住民ノ所有スル田畑地價	同上割合 %	他町村住民ノ所有スル田畑地價	同上割合 %
安房	三、九三一、三六七・四九〇	三、七〇二、七一五・〇八〇	九四・二八	二二八、六五二・四一〇	五・八二

夷	君	長	山	市	千	東	印	香	海	匣
隅	津	生	武	原	葉	飾	旛	取	上	瑛
二、五〇八、四〇〇・八六五	四、八九七、九一二・四四一	三、二〇二、九一八・六三〇	四、一〇一、四三五・六〇〇	二、七二四、〇八六・七九五	一、九九〇、〇三六・四〇〇	三、八六八、一七三・五七〇	四、二二三、四六六・六八〇	五、九八八、九〇五・三四九	一、四〇一、八三六・一八〇	一、三四三、八五二・九四〇
二、二二〇、四三八・六一〇	四、三五三、六三八・三六七	二、九一三、四六五・五四〇	三、六九九、九九〇・九一〇	二、三九七、八七八・二九六	一、七七七、七八七・八三〇	三、一九一、四八九・二一〇	三、六五四、七九三・五〇〇	五、一三八、四二一・六五〇	一、一七七、八六八・五二〇	一、一四七、六五二・三二〇
八八・五三	八八・八九	九〇・九六	九〇・二一	八八・〇四	八九・〇三	八二・五一	八六・三三	八五・七九	八四・〇二	八五・四〇
二八七、九六二・二五五	五四四、二七四・〇七四	二八九、四五三・〇九〇	四〇一、四四四・六九〇	三二六、二〇八・四九九	二一八、二四八・二一〇	六七六、六八四・三六〇	五七八、六七三・一八〇	八五〇、四八三・六九九	二二三、九六七・六六〇	一九六、二〇〇・六二〇
一一・四八	一一・一一	九〇・四	九七・九	一一・九六	一〇・九七	一七・四九	一三・六七	一四・二一	一五・九八	一四・六〇

二四

合	計	四〇、一九二、三九二・五八〇	三五、三七〇、一三九・八三三	八八・〇〇	四、八二二、二五二・七四七	一一〇〇
---	---	----------------	----------------	-------	---------------	------

前記二表を通覽するに反別に於ても又地價に於ても自町村住民の所有するもの最も多きは安房郡にして九割四分以上を占め長生、山武二郡之に亞き孰れも九割以上に達せり、之に反して他町村住民に所有せらるゝもの、最も多きは反別に於ては海上郡の一割七分にして東葛飾、印旛、香取、匣瑛各郡之に亞き地價に於ては東葛飾郡の一割七分五厘にして海上、匣瑛、香取、印旛各郡之に亞けり、而して一二の例外を除き大體に於ては下總に屬する各郡は他町村住民に所有せらるゝ畑畑割合に多く安房、上總に屬するものは之に反せり

三、農家

(イ) 農家戸数及農業人員

最近の調査に依れば本縣に於ける農家は農本業十二萬五千九百九十九戸、農副業三萬一千八百六十一戸合計十五萬七千八百六十戸にして現住總戸數に對し約六割八分三厘に相當せり而して農家人口にありては農業に従事する者四十六萬三千三百八十一人從事せざるもの四十五萬八千九百八十人合計九十二萬二千三百六十一人之を現在總人口に對比するときは約六割六分四厘にして一戸平均五人八分強に當り本縣總人口より見たる一戸平均數に比し稍や少きの現狀にあり

(ロ) 自作者と小作者

最近數ヶ年の統計に依り自作農と小作農との割合を調査するに年々多少の増減あれども概ね自作農にありては漸次減少に傾き小作農及自作兼小作農にありては何れも増加するの傾向あるが如し

今明治三十九年以降に於ける變遷を示せば次の如し

年次	自作	自作兼小作	小作	年次	自作	自作兼小作	小作
明治三十九年	三二・二七%	四一・四九%	二七・二四%	明治四十二年	三一・〇六%	四二・三四%	二六・六〇%
同 四十年	三三・〇八%	四二・〇五%	二五・八七%	同 四十三年	三〇・五四%	四二・八五%	二六・六一%
同 四十一年	三〇・三七%	四二・六九%	二六・九四%	同 四十四年	二四・八三%	四七・二三%	二七・九四%

備考 本調査の方法明治四十四年以降は五年毎の調査に改めたるを以て明治四十四年の統計に止めたり

更に明治四十四年現在各郡に於ける自作及小作農戸數を示せば次の如し

郡名	農家戸數		總戸數ニ對スル割合	
	自作	自作兼小作	自作 %	自作兼小作 %
安房	九〇二一	八、九〇三	四六・三二	四五・六七
夷隅	三、一二五	六、六六〇	二七・一六	五七・八八
君津	四、〇九四	九、〇六七	二四・一八	五三・五五
長生	二、六八〇	六、八九二	二一・六四	五七・七九
山武	三、五九八	六、六四二	二三・九五	四四・二〇
市原	一、九三五	四、三六〇	一九・三〇	四三・五〇
千葉	一、九二七	三、五一三	二〇・四二	三七・二三

(八) 農家耕作地の廣狹

最近の統計に依り本縣農家の耕作地面積の變遷を見るに一町歩以下を耕作するもの半數以上にして然かも年々其の割合増加し所謂小農の増加する傾向あるが如し

郡名	耕作地面積		小農耕作面積		小農耕作面積割合
	自作	自作兼小作	面積	戸數	
東葛飾	三、三七九	八、一八一	七、四四八	一七、七八	四三・〇四
印旛	二、九七四	六、六六四	六、五〇九	一八、四二	四一・二七
香取	三、三九三	八、〇四四	五、六〇九	一九、九〇	四七・一九
海上	一、三二二	三、一六三	一、五七七	二一、六八	五二・二六
匝瑳	一、七六四	二、四六五	一、〇三三	三三・五二	四六・八五
合計	三九、一九一	七四、五五四	四四、一五	二四・八三	四七・二三

今明治三十九年以降六ヶ年間の増加割合を示せば次の如し

年次	五反歩未満		五反歩以上一町歩未満		合計	一町歩以上二町歩未満		二町歩以上五町歩未満		五町歩以上三十町歩未満		合計
	歩	%	歩	%		歩	%	歩	%	歩	%	
明治三十九年	二六二〇	26.2%	三三六〇	33.6%	五九八〇	29.8%	九七七	9.7%	〇・五九	0.59%	四〇・二〇	
同 四十年	二七六〇	27.6%	三一八一	31.1%	五九・四一	29.3%	一〇・六九	10.69%	〇・五五	0.55%	四〇・五九	
同 四十一年	二八〇〇	28.0%	三二・二二	32.2%	六〇・二二	29.6%	九・四八	9.48%	〇・六五	0.65%	三九・七八	
同 四十二年	二九・一二	29.1%	三五・六〇	35.6%	六四・七二	31.5%	三・五〇	3.50%	〇・二八	0.28%	三五・二八	
同 四十三年	二九・五一	29.5%	三五・二三	35.2%	六四・七四	31.5%	三・四六	3.46%	〇・二八	0.28%	三五・二六	
同 四十四年	二七・二四	27.2%	二四・二五	24.2%	五一・四九	25.1%	—	—	〇・一五	0.15%	四八・五一	

(二) 農家一戸に對する耕地平均反別

大正三年十二月末日現在農家一戸に對する耕地平均反別次の如し

郡名	農家戸數	農家一戸ニ對スル耕地面積			
		田	畑	合計	計
安房	一九、四九六	四・六反	二・五反	七・一	七一
夷隅	一一、五〇七	六・二反	三・三反	九・五	九五
君津	一六、九三三	七・七反	三・二反	一〇・九	一〇・九
長生	一一、九二五	七・五反	四・八反	一二・三	一二・三
山武	一五、〇二六	八・一反	五・九反	一四・〇	一四・〇
市原	一〇、〇二四	七・三反	四・七反	一二・〇	一二・〇
千葉	九、四三五	四・〇反	七・七反	一一・七	一一・七
東葛	一九、〇〇八	五・一反	七・四反	一二・五	一二・五
印旛	一六、一四七	六・四反	七・九反	一四・三	一四・三

香	取	一七、〇四五	三二二
海	上	六、〇五二	四・五
距	差	五、二六二	六・二
合	計	一五七、八六〇	五・六
			五・二
			一・一八

(ホ) 農事教育を受けたる人員

農村に於ける農事教育は年を遂ふて發達し既に是等各種の教育を受けたる者農業に従事する者の中約一割を占むるに至れり、明治四十三年以降五ヶ年間に於ける増加の趨勢を示せば次の如し

年次	農學校農事講習所及之ニ準シタルモノヲ卒業シタル者			農事講習會ニテ講習ヲ受ケタル者		合計
	小學程度	中學程度	高等學校程度	大學程度	合計	

明治四十三年	三八六〇	六八〇	八二	一〇	三〇、八六八	三五、五〇〇
同 四十四年	四、二五八	七七八	七八	一三	三三、四〇三	三八、五三〇
大 正 元 年	四、五三六	八六五	八七	一一	三四、五一一	四〇、〇一〇
同 二 年	五、三一八	一、一〇四	一〇九	一七	三五、七二〇	四二、二六八
同 三 年	六、二九〇	一、二〇八	一一六	一八	三四、三三七	四一、九六九

四、農作物

農産物は本縣生産物の首位を占め之が消長は經濟上に至大の關係を有す、今最近十ヶ間に於ける農産物の生産額を掲ぐれば左の如し

明治三十八年	三三、一七七、三三五	明治四十年	三八、四七七、〇二四
同 三十九年	三三、二二一、九〇一	同 四十一年	三五、二〇七、七七六

明治四十二年	三二、一七八、九二九	大正元年	五八、三七七、一五七
同 四十三年	三二、六八五、六七四	同 二年	六〇、一七四、一九二
同 四十四年	四六、九五〇、一〇六	同 三年	四二、六六四、〇八〇

農産物の生産は逐年増加するに拘らず其の價額は前記の如く必ずしも累進するに非らず年により著しき高低あるは主として物價の變動に歸因するものにして、就中其の六割を占むる米價の變動は以て之が主因となすを得べし、左に最近十ヶ年間の米價の變遷を示し生産額の増減と比較するに便せんとす

年	米收穫高 石	價額 円	一石平均價額 圓
明治三十八年	一、五一四、三六四	二〇、八四〇、五五三	一三、八七三
同 三十九年	一、四一三、九三七	二〇、五八二、〇〇八	一四、六二〇
同 四十年	一、六七七、二二八	二六、〇五七、五六九	一五、五五〇

同 四十一年	一、七〇五、三九〇	二二、七二七、〇三八	一三、二五六
同 四十二年	一、八四七、七〇七	一九、六三一、八二五	一〇、六七四
同 四十三年	一、三四九、四九八	一八、八三〇、九八二	一四、二四五
同 四十四年	二、〇三一、三七三	三二、三三五、八四七	一五、三八八
大正元年	二、〇〇三、六七八	三九、六二〇、三九七	一九、二一八
同 二年	一、九三五、三五〇	三九、九〇五、八三一	二〇、六一七
同 三年	二、二一〇、八〇三	二六、八六一、九三八	一二、五〇八

以下農作物の各種類に付其の概要を記述すべし

(イ) 稻

作付反別 大正三年度作付反別は十一萬四千九百七十九町六反歩にして、耕地面積の六割二分強に當れり、最近十ヶ年間の作付反別の變遷次の如し

年次	梗米	糯米	陸米	合計
明治三十八年	九一、五七九〇	一〇、六一七二	三、五七三・七	一〇五、七六九・九
同三十九年	九〇、七九六八	一〇、四四九・五	三、九七一・〇	一〇五、二一七・三
同四十年	九一、七二七七	一〇、五四〇・七	四、八一〇・八	一〇七、〇七九・二
同四十一年	九一、九六九三	一〇、七六九・三	五、八〇六・六	一〇八、五四五・二
同四十二年	九二、一五七七	一〇、六二七・二	六、二六〇・六	一〇九、〇四五・五
同四十三年	九二、三〇三三	一〇、八一〇・九	六、五七九・四	一〇九、六九三・六
同四十四年	九四、九六〇〇	八、四五二・二	七、五六九・九	一一〇、九八二・一
大正元年	九五、四六六八	八、一八九・八	九、〇一九・一	一一二、六七五・七
同二年	九六、三九一七	七、九九七・九	一〇、四一五・四	一一四、八〇五・〇

同三十八年	自明治三十八年 至同四十二年平均	自明治三十八年 至大正三年平均
九七、〇二五・九	九一、六四六・一	九五、二二九・五
七、八六〇・六	一〇、六〇〇・八	八、六六二・三
一〇、〇九三・一	四、八八四・五	八、七三五・四
一一四、九七九・六	一〇七、一三一・四	一一二、六二七・二

右の如く稻作付反別は逐年著しく増加し明治三十八年より大正三年に至る十ヶ年中明治三十八年より同四十二年に至る前五ヶ年平均十萬七千三百三十一町四反歩と明治四十三年より大正三年に至る後五ヶ年平均十一萬二千六百二十七町二反歩とを比較すれば實に五千四百九十五町八反歩を増し、且つ明治三十八年と大正三年とを見れば六千八百五十七町三反歩の増加にして平均一ヶ年六百八十五町七反歩の増率を示せり、就中増加の著しきは陸米にして、水稻作付反別が前半期平均十

萬二千二百四十六町九反歩より、後半期平均十萬三千八百九十一町八反歩に進みて一千六百四十四町九反歩を増したるに比し、陸稻の作付反別は前半期平均四千八百八十四町五反歩より後半期平均八千七百三十五町四反歩となり其の増加實に三千八百五十町九反歩を示せり

次に農業者一戸に對する作付反別を算出すれば次の如し

明治三十八年	六反四畝強	明治四十三年	六反七畝強
同 三十九年	六反四畝強	同 四十四年	六反八畝強
同 四十年	六反六畝弱	大正元年	七反一畝強
同 四十一年	六反六畝強	同 二年	七反二畝強
同 四十二年	六反七畝弱	同 三年	七反三畝弱

即ち既往十ヶ年間に平均約一反歩の増加を見たり

更に大正三年度に於ける各郡作付反別並農家一戸當り作付反別を掲ぐれば左表の如し

大正三年度各郡稻作付反別並農家一戸當り反別表

郡名	米	糯	陸	合	計	農家一戸當り作付反別
安房	八、二〇・五町	七九八・一町	一〇四・〇町	九、〇二二・六町	九、〇二二・六町	四・六強
夷隅	六、四四五・九町	五八七・五町	九九・一町	七、一三二・五町	七、一三二・五町	六・二弱
君津	一一、〇九一・三町	九三七・一町	五二一・七町	一二、五四二・〇町	一二、五四二・〇町	八・〇弱
長生	八、二九五・四町	六四二・〇町	五一四・八町	九、四五二・二町	九、四五二・二町	七・九強
山武	一一、四三二・八町	七〇二・六町	一、〇五九・六町	一三、一九五・〇町	一三、一九五・〇町	八・八弱
市原	六、八〇一・六町	四五四・四町	九〇七・〇町	八、一六三・〇町	八、一六三・〇町	八・一強

收穫高 最近十ヶ年の收穫高を示せば次の如し

年次	梗米	糯米	陸米	合計
千葉	三、四三九・三	三、四六・五	一、〇七二・七	六・〇〇
東葛	八、六七四・七	一、〇五二・三	二、三八七・八	六・四四
印旛	九、六一二・四	六八五・六	二、〇六六・二	七・六〇
香取	一四、九九一・七	一、四四五・一	八五七・〇	一〇・〇〇
海上	三、二四九・五	二六一・五	二九九・四	六・三四
匝瑳	三、八七一・〇	二四七・九	二二一・八	八・二〇
合計	九七、〇二五・九	七、八六〇・六	一〇〇、九三三・一	七・三〇

四〇

收穫高は前表の如く年の豊凶に依り多少の増減ありと雖逐年増加の傾向あり、而

年次	梗米	糯米	陸米	合計
明治三十八年	一、三四七、三四七 ^石	一、三九、四一八 ^石	二七、五九九 ^石	一、五一四、三六四 ^石
同三十九年	一、二四七、三三四	一、三三、二六一	三三、三五二	一、四一二、九三七
同四十年	一、四七六、七六四	一、五三、八一五	四六、五四九	一、六七七、一二八
同四十一年	一、四六九、八一三	一、五八、四六九	五七、一〇八	一、七〇五、三九〇
同四十二年	一、六二四、八四五	一、七〇、三〇六	五二、五五六	一、八四七、七〇七
同四十三年	一、一六七、〇五〇	一、二四、二一〇	五八、二三八	一、三四九、四九八
同四十四年	一、七九六、〇〇五	一、四七、四六三	八七、九〇五	二、〇三三、三七八
大正元年	一、七八〇、四一七	一、四二、八五四	八〇、四〇七	二、〇〇三、六七八
同二年	一、七二〇、三三九	一、三四、二二五	九〇、七八六	一、九三五、三五〇
同三年	一、九〇四、八七七	一、四一、〇五六	七四、八七〇	二、一〇〇、八〇三

四一

して最近十ヶ年間に收穫高六十萬六千四百三十九石を増加し一ヶ年平均六萬石餘の増率に當れり

更に一反歩當收穫高の變遷を示せば次の如し

年次	梗米	糯米	陸米	平均
明治三十八年	石 一・四七一	石 一・三三三	石 〇・七七三	石 一・四三三
同三十九年	一・三七四	一・二六六	〇・八四〇	一・三四三
同四十年	一・六一〇	一・四五九	〇・九六八	一・五六六
同四十一年	一・六二〇	一・四七一	〇・九九六	一・五七一
同四十二年	一・七六二	一・六〇三	〇・八九九	一・六九四

次に大正三年度各郡收穫高並一反歩當收穫高を示せば次の如し

大正三年度各郡收穫高並一反歩當收穫高表

郡名	梗米	糯米	陸米	合計	反當收量
同四十二年	一・二六四	一・一四九	〇・八八五	一・二三〇	
同四十四年	一・八九一	一・七四五	一・一六一	一・八三〇	
大正元年	一・八〇五	一・七四四	〇・八九二	一・七七八	
同二年	一・七七四	一・六七八	〇・八七二	一・六八六	
同三年	一・九六三	一・七九四	〇・七四二	一・八四四	
自明治三十八年至同四十二年五ヶ年平均	一・五六七	一・四二二	〇・八九三	一・五二二	
自明治四十三年至大正三年五ヶ年平均	一・七三九	一・六二二	〇・九一〇	一・六七四	

海	香	印	東	千	市	山	長	君	夷	安
			葛							
上	取	嶺	飾	葉	原	武	生	津	隅	房
六七、一四二	三〇一、六四三	二〇一、一四四	一五九、四三四	六八、五七二	一三五、六八一	二二八、一一一	一四九、〇三〇	二五三、八九九	一二四、二七二	一五九、四一一
五、一五〇	二、一五〇	一三、四七〇	一八、八七〇	六、五七〇	八、二三三	一一、一七三	八、八九二	一八、四一九	九、八三八	一三、九〇七
二、九六六	八、一四八	一四、六四一	一七、四七四	五、六九五	四、七二四	八、三〇三	三、九三九	四、〇〇九	一、〇二〇	一、〇九五
七五、二五八	三三三、三〇一	二二九、二五五	一九五、七七八	八〇、八三七	一四八、六三八	二三八、五八七	一六一、八六一	二七六、三二七	一三五、一三〇	一七四、四一三
一、九七五	一、九五〇	一、八五四	一、六一六	一、六六四	一、八二〇	一、八〇八	一、七一一	二、〇四一	一、八九五	一、九三三

四四

合	匝
計	差
一、九〇四、八七七	六六、五三八
一四一、〇五六	四、〇二四
七四、八七〇	二、八五六
二、一二〇、八〇三	七三、四一八
一、八四五	一、六九五

種類 前記大正三年度作付反別十一萬四千九百七十九町六反歩を早中晩三種に區別すれば

- 早生種 二萬四千六百四十町二反歩
- 中生種 五萬一千三百〇一町八反歩
- 晩生種 三萬九千三十七町六反歩

にして早生種二割一步四厘、中生種四割四分六厘、晩生種三割四分の割合なり
品種は地方に依り同物異名、又は異物同名等ありて其の實數を知ること困難なれ

四五

ども最近の調査によれば、水稻にありては九百四十二種、陸稻にありては百四十
一種に達せり、更に之を早中晩に區別すれば次の如し

		水稻		陸稻		合計	
早生種	中生種	早生種	中生種	早生種	中生種	早生種	中生種
二八二	三三九	五五	四七	三三七	三七六		
三三一	三三一	三九	三九	三七〇	三九〇		
九四二	九四二	一四一	一四一	一〇八三	一〇八三		
水稻	早生種、信州、信州金子、上總、撰田	陸稻	早生種、愛國、大和錦、近江、關取、高砂、荒木	陸稻	晚生種、神力、竹成、張蟹目	陸稻	吉川、久藏、早不知、凱旋、京早生、富國、凱旋糯

而して是等各品種中、其の栽培反別の比較的多きものを擧ぐれば次の如し

右の中水稻、信州、信州金子、愛國、大和錦、高砂、關取、近江、神力、竹成、
張蟹目の十一種は優良品種として、本縣採種田に栽培せられ之が改良普及に努
めつゝあり、今其の特徴を述べれば次の如し

信州 (早生種)

莖細く穂は短くして小さく、元來は無芒なれども時々僅に短き芒を生ずることあり、株張強くして一株の本
數割合に多きと米質良く收量比較的多きは(一反歩平均收量二石三斗)本種の特長にして、遅れ穂を生じ易く、
且出來過ぎの場合倒れ伏すを常とし又籾皮薄き爲め發芽し易きの缺點あり、早生種の中にも稍遅き方にし
て其の成熟期は早きは九月十日頃、遅きは九月二十三、四日頃、普通九月二十日頃なりとす、而して粒は小形
にして長味を帯び腹白く品質良好なり

信州金子 (早生種)

本種は全體の品柄殆ど前種と異なる點なき程酷似すれども元來此の種類は前種の莖弱くして倒れ易き缺點を改
良せんが爲めに信州中より撰出したるものなれば稍莖の強きを本種の特點となす

愛國 (中生種)

莖太く丈夫にして葉も廣く多少の出来過ぎの觀ありと雖も倒るゝことなく、能く風雨に堪ゆるを以て本縣の如き平坦卑濕の地にして風當り強く且つ河沼多く水害頻りに至る土地柄に最も適せり、穂は長く大形にして芒又長く全體の色は赤褐なれども本種は元來非常なる變化性に富み之が爲め籾の色澤、芒の長短、籾付の粗密等に相違多く殆ど別物の觀あるものなきにあらざり近時無芒のものをさへ生ずるに至れり、粒形は中位にして圓く腹白多く肥へて色澤に乏しく品質良好ならずと雖、粒付は極めて密にして株張の稍少きにも不拘、收量多く(一反歩平均二石五斗)且つ市場に於ける賣行宜しきを以て經濟的良種と云ふべし、成熟期は概ね九月下旬より十月初旬頃なりとす

關取 (中生種)

草丈中位にして細柄なれども強し、穂は短くして小形に芒無く全體の色合、淡黄にして外見は粒付疎、穂並淋しく見ゆるも株張強く實際の收穫高は割合に多し(一反歩平均二石二斗内外)粒は小形にして光澤あり腹白少く品質極めて良好なり、中生種としては遅き分に屬し其の熟期は概ね十月中旬頃とす

大和錦 (中生種)

草丈中位、株張弱きも莖は太く強くして倒るゝこと少く、穂並能く揃ひ、出来榮頗る見事に粒付密なれば收

量多し(一反歩平均二石五斗)然れども溢れ易く品質良好ならざるの缺點あり、穂は大形にして長く芒の長さは中位にして全體の色合は黄金色を呈し、粒形は寧ろ中粒にして稍圓く成熟期は通例十月中旬頃なりとす(本種には同名にして品質全く異なるものあり)

近江 (中生種)

全體の品柄關取種に似たるも草丈は寧ろ長き方にして莖は太からざるも割合に強し、穂は小形にして芒無きを常とすれども時々短き芒を生ずるものあり、粒は關取種より稍大なるを普通とし細長く光澤あり、品質良好にして東京市場向なり、成熟期は十月上旬にして一反歩平均收量二石三斗内外なるを常とす

高砂 (中生種)

莖太きも株張少く草丈長くして倒伏し易きと稍溢れ易く且つ赤米を生じ易きは本種の缺點なりとす、然れども年により豊凶の差少く粒付は粗なるも穂は大にして收量稍多し、(一反歩平均二石三斗内外)穂は最初白芒なるも成熟期に至れば淡黄褐色に變じ粒は中形にして稍圓く品質良好なり、成熟期は十月中旬を以て普通とす

神力 (晩生種)

草丈短く小柄の稻にして粒付は寧ろ疎に且つ成熟の際溢れ易きも株張強く、風害に耐ゆるの力あるを以て收

量は存外に多く(一反歩平均二石五斗)暖地の平坦部には最も適當せり、穂は短く無芒にして全體の色合は淡黄に粒は中形、腹白多く光澤に乏しきも品質悪しからず、熟期は普通十一月上旬なりとす

成竹 (晩生種)

全體の品柄中形にして無芒なるを本性とすれども時に短き赤芒を生ずることあり、株張は神力より劣るも先づ中位にして穂は長く穂並美しく色合淡黄光澤あり、粒は小粒にして光澤あり品質稍宜しく一反歩收量二石三斗内外なるを普通とす、成熟期は概ね十月下旬より十一月上旬に及べり

×張 (晩生種)

莖稍太く株張は少きも粒付多きため收量比較的多し(一反歩二石三斗)穂は長く無芒にして全體茶褐色を呈し、粒は小形細長にして關取より稍太く色澤ありて品質良好なり、成熟期は普通十月廿五六日頃とす

蟹目 (晩生種)

莖太く穂並能く揃ひ株張亦尠ならず、出來榮愛國に似て收量平均二石四斗内外なり、穂は長く全體の色合赤褐色にして先端にのみ稍長き同色の芒を有し粒付は密に粒は小形にして稍圓く、腹白多く光澤に乏しくして、品質良好ならず、成熟期は普通十一月上旬頃なりとす

(口) 麥

作付別反 大正三年度作付面積は大麥三萬九千二百十九町七反歩、裸麥三千六百三町四反歩、小麥一萬六千八百二十四町四反歩、合計五萬九千七百七町五反歩にして稻作付面積の五割一分以上に當れり

今既往十ヶ年の作付反別逐年比較を表示すれば次の如し

麥作付反別逐年比較表

年次	大麥		裸麥		小麥		合計	
	田	畑	田	畑	田	畑	田	畑
明治三十八年	九,四八四・二町	五,七五七・五町	一〇,一〇〇・〇町	二,五五三・七町	三,六二二・二町	一〇,一〇〇・〇町	一〇,一〇〇・〇町	一〇,一〇〇・〇町
	計		計		計		計	

明治三十九年	九三、三〇三、七〇三、一四三、六二六、四	一〇三、一三二、四三、七	二、五五、四、八	五、九八、二、七、八、四、二、一、〇、五、六、二、五、六、八、三、二、五、七、九、九、四
同 四十年	九二、五、四、三、八、〇、一、四、三、〇、一、六	一〇〇、四、二、三、〇、一、七	二、四、〇、一、一	三、〇、三、三、三、五、四、〇、〇、二、五、四、三、一、〇、五、二、三、五、七、〇、五、八、五、八、二、五、〇、〇
同 四十一年	八九、四、〇、四、二、〇、六、六、二、四、二、九、六、〇、二	一〇一、五、二、三、三、九、三	二、三、四、一、八	二、七、七、三、二、八、九、九、一、二、九、三、三、八、一、〇、三、四、二、五、七、二、〇、〇、六、五、八、三、四、八
同 四十二年	八九、九、五、四、一、八、九、五、六、四、二、七、九、五、一	九六、三、三、五、一、八、四	二、六、二、四、六	三、一、六、一、三、三、四、一、五、一、三、四、四、六、七、一、〇、七、三、五、七、八、三、九、一、五、八、八、五、六、四
以上五ヶ年平均	九二、六、六、四、一、三、三、三、三、四、三、三、九、九	一〇一、〇、二、三、九、一、四	二、四、九、五、四	三、一、一、二、三、〇、九、〇、二、三、三、〇、〇、二、一、〇、四、八、八、五、七、〇、二、四、六、五、八、〇、七、五、四
明治四十三年	八七、二、三、四、一、五、四、三、九、四、二、四、六、二	一〇〇、六、二、六、六、五	二、七、六、七、六	三、〇、七、一、四、一、三、三、四、一、四、一、六、四、一、一、〇、〇、九、一、五、八、三、三、八、三、四、七、九
同 四十四年	八一、三、四、三、三、八、七、三、六、一、五、二、一	一一三、八、二、四、〇、六、九	二、五、三、〇、七	六、一、七、一、六、一、〇、〇、五、一、六、〇、七、二、二
大正元年	七六、九、〇、三、六、一、八、二、三、七、三、七、七、二	一一九、九、六、二、四、四、〇、九	二、五、九、〇、五	七、六、七、一、六、五、〇、八、一、一、六、五、八、四、八
同 二年	八三、八、〇、七、五、八、七、三、八、四、六、七	一九五、六、二、六、四、五、〇	二、八、〇、〇、六	五、五、二、一、六、二、七、五、七、一、六、三、三、〇、九、一、〇、八、八、八、五、六、五、〇、九、四、五、九、一、二
同 三年	八三、五、五、三、五、六、二、五、九、二、九、七	二二六、五、二、八、四、六、九	三、〇、六、三、四	五、九、二、一、六、七、五、二、一、六、八、三、四、四、一、一、三、九、二、五、七、九、六、八、三、五、九、一、〇、七、五
以上五ヶ年平均	八三、一、三、七、八、九、一、三、八、七、〇、四	一五四、三、二、一、〇、〇、二	二、七、四、四、六	五、六、七、一、五、九、九、六、一、五、九、九、五、三、一、〇、四、二、二、五、六、四、一、五、一、〇、四、二、〇、五、七、四、七、〇、二

前表作付反別を農家一戸に配當すれば次の如し

明治三十八年	三反五畝弱	明治四十三年	三反六畝強
同 三十九年	三反六畝弱	同 四十四年	三反四畝弱
同 四十年	三反六畝弱	大正元年	三反六畝弱
同 四十一年	三反六畝弱	同 二年	三反六畝強
同 四十二年	三反六畝強	同 三年	三反七畝強

即ち最近十ヶ年間殆ど増減なく一戸當三反六畝内外に當れり

次に大正三年度に於ける各郡作付反別及一戸當平均作付反別を示せば左の如し

郡名	大		小		合	
	田	畑	田	畑	田	畑
	計	計	計	計	計	計
	均	均	均	均	均	均
	反	反	反	反	反	反
	作	作	作	作	作	作
	付	付	付	付	付	付
	別	別	別	別	別	別

海	香	印	東	千	市	山	長	君	夷	安
上	取	旆	葛	葉	原	武	生	津	隅	房
二七五	二一六	一六	三〇	〇七	四六八	二二	六二	五七九	二二	一七
二、三九四	三、三七一	五、九二〇	四、六五五	三、五六四	二、八六四	三、六〇六	三、五三〇	二、六六三	二、七三〇	二、六〇三
二、三六九	三、三三七	五、九三六	四、六九五	三、五六八	二、九三三	三、六〇七	三、五八一	三、二四九	二、七四七	二、八五三
二七一	二二四	—	—	—	〇・一	三〇四	〇・一	一〇九〇	一四	七〇
二九六一	四九・三	二六・五	二九・九	三二・〇	七五	八七五	七七八	三八四七	一三九二	六五七
三三三	四八七	二六一	二九九	一五二	七六	九〇九	七七九	四九三七	一四〇六	七三九
一一三	〇・五	—	〇・六	—	一〇	〇・二	二〇	二六〇	〇・三	一七四
三七二	一、五八三	三、二〇三	四、五四七	二、六四四	六七六	一、四九六	五六七	七五八	一八五	三八七
三八三	一、五八一	三、二〇七	四、五四二	二、六四四	六七八	一、四九七	五六八	七五九	一八六	三八八
六五九	一、四八	三・六	三・六	〇・七	四七九	五六	八二	七二八	三・〇	二六四
二、九七六	五、〇九七	八、六〇八	九、四七〇	六、三六	三、五七一	五、二二七	八、一七三	三、七九八	三、〇六〇	三、七三三
二、九三三	五、〇四二	八、六二二	九、四七六	六、三二二	三、六九四	五、二八三	八、一五〇	三、七九八	三、〇五〇	三、九六八
四・九	三・三	五・四	五・〇	六・七	三・六	三・四	三・五	二・七	二・八	二・三

收穫高 既往十ヶ年に於ける收穫高次の如し

年	次	大	麥	裸	麥	小	麥	合	計	價	額
明治	三十八年	五四五、一四二	石	二五、六六八	石	九二、二六七	石	六六三、〇七七	石	四、一四三、六九二	円
同	三十九年	六三一、七八二	石	三〇、〇七五	石	一一七、六二六	石	七七九、四八三	石	三、六七七、〇〇九	円
同	四十年	六五八、〇五四	石	二九、三七四	石	一二九、八七九	石	八一七、三〇七	石	四、二八一、四〇六	円
同	四十一年	六〇九、三五九	石	二七、六〇二	石	一二四、三一四	石	七六一、二七五	石	四、四四〇、一三六	円
同	四十二年	五五三、八八四	石	二九、九三九	石	一二二、二九〇	石	七〇六、一一三	石	四、一〇八、三〇七	円
合計		八、五三八、三三三	石	二、三九二、二九七	石	二、六五二、八四六	石	一、三三九、三三七	石	一、七二六、二二一	円
平均		—	石	—	石	—	石	—	石	—	円
合計		八、五三八、三三三	石	二、三九二、二九七	石	二、六五二、八四六	石	一、三三九、三三七	石	一、七二六、二二一	円

年次	大麥	小麥	平均
明治四十三年	六三三、七〇五	一五〇、七八八	四、三四七、二四一
同 四十四年	六五〇、八八一	一八八、五五二	五、〇九五、四四一
大正元年	六九三、九一六	二〇二、三三一	七、一九五、〇〇四
同 二年	七五一、九三二	二〇七、五八一	七、三七二、〇〇九
同 三年	七二四、二二二	一九一、五四七	五、〇九六、九二〇
前五ヶ年平均	五九九、六四四	一一七、二七五	四、一三〇、一一〇
後五ヶ年平均	六八八、七三一	一八八、一六〇	五、八〇六、二二三

五六

即ち逐年増加の傾向にして前五ヶ年平均七十四萬五千四百五十一石は後五ヶ年平均九十一萬六千八百七十九石となり約二割三分の増加を示し其の價額に於ては四割餘を増加せり

更に一反歩收穫高を示せば次の如し

年次	大麥	小麥	平均
明治三十八年	一、二五二	〇、八三七	一、一六一
同 三十九年	一、四四八	一、〇〇一	一、三四六
同 四十年	一、五一九	一、〇三四	一、四〇三
同 四十一年	一、四一八	〇、九六二	一、一八七
同 四十二年	一、二九四	〇、九〇九	一、二〇〇
同 四十三年	一、四九三	一、〇六五	一、二八七
同 四十四年	一、八〇〇	一、一七三	一、六〇〇
大正元年	一、六一五	一、四二八	一、六五〇

五七

大正二年	同三年	前五ヶ年平均	後五ヶ年平均
一九五七	一八二一	一三八六	一七三七
一九九二	一四八五	一四四六	一四五〇
一二七一	一二三八	〇九四九	一七三三
一七四四	一六〇九	一二五九	一五七八

五八

即ち一反歩平均収量も亦漸次年と共に増進し殊に明治四十四年度以降は其の増加著しきものあり而して前五ヶ年平均収量と後五ヶ年平均収量とを比較するときは實に二割五分の増収を示せり
次に大正三年度に於ける各郡收穫高を表示すれば次の如し

郡名	大麥	裸麥	小麥	合計	大麥一反歩収量	裸麥一反歩収量	小麥一反歩収量	平均
----	----	----	----	----	---------	---------	---------	----

安房	五八、八四二	一一、〇六八	五、四三〇	七六、三四〇	二、〇六二	一、六三三	一、三四一	一、九一〇
夷隅	四七、八三三	二、一四三	二、三四七	五二、三二三	一、七四〇	一、五二四	一、一五四	一、七〇三
君津	五七、一五六	六、七六八	九、一一一	七三、〇三五	一、七五九	一、三七一	一、二二二	一、六二九
長生	五〇、九六五	七〇四	四、七八四	五六、四五三	一、四四〇	〇、九〇四	〇、八四〇	一、三四九
山武	六四、〇五八	一、一七五	一四、五五六	七九、七八九	一、七七六	一、二九三	一、〇二五	一、五五九
市原	四五、七九一	一〇〇	六、二二七	五二、一〇八	一、五六一	一、三一六	〇、九一六	一、四四〇
千葉	七三、五二七	二、二二〇	三二、八八三	一〇八、六三〇	二、〇六三	一、四七〇	一、二四三	一、七〇七
東葛飾	九四、七八〇	三、七八六	五五、〇六三	一五三、六二九	二、〇三四	一、四〇三	一、二二一	一、六二一
印旛	九四、七六四	三、三三八	三四、六五五	一三二、七五七	一、八二五	一、二七六	一、〇八一	一、五二九
香取	六五、五八八	七、四〇七	一七、七〇六	九〇、七〇一	一、九三八	一、六一五	一、一一九	一、六七三
海上	四〇、四二一	五、一四八	四、四〇六	四九、九七五	一、七八三	一、五九三	一、二四九	一、六八一

五九

計	七二四、二二二	四五、四八七	一九一、五四七	九五、二五六	一、八二一	一、四八五	一、一三八	一、六〇九
差	二〇、四九七	六三〇	四、三八九	二五、五一七	一、六七六	一、二六八	〇、九八一	一、四八五

六〇

種類 最近の調査に依れば本縣に栽培せらるゝ品種の數次表の如し

大麥	五六	四五	三〇	一三一
裸麥	四〇	三〇	一四	八四
小麥	五三	五四	三五	一四二
計	一四九	一二九	七九	三五七

合計三百五十七種の多きを算し、或は異名同物、或は同物にして地方により早中晩を異にするもの等あり實際の數或は之より少なるべし、而して是等多數の品

種中比較的栽培面積廣く、且つ優良なるものと認められべきものを擧ぐれば次の如し

- 大麥、關取、穗揃、三徳、五畝四石、竹林、六角、穗長(長穗とも云ふ)、ゴールドンメロン、坊主
- 裸麥、米裸、豊年、米いらす
- 小麥、赤皮、豊國、相州(若槻とも云ふ)、チャボ、赤タルマ、細程、穗揃

附、醸造用大麥の栽培

本縣に於ける麥酒醸造用大麥ゴールドンメロンの栽培奨励は明治三十九年縣農會が大日本麥酒株式會社と各郡農會との間に斡旋し同種の契約栽培をなさしめたるに生まれり、而して當初之が契約に加入したるは君津外七郡農會なりしも漸次減少し明治四十四年に於ては東葛飾及印旛二郡のみとなりしを以て縣農會

は従前の中間斡旋を中止し同年度よりは直接前記二郡農會をして同會社と契約せしめ爾來二郡にて年々二千五百石乃至五千石の共同販賣を行ひつゝ今日に及びり、而かも本事業の如きは今後大に有望にして當業者の耕種方法に習熟するに於ては前二郡に止まらず他郡に於ても亦之が栽培の普及を見るに至るべし

(ハ) 粟

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高を擧ぐれば次の如し

年	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	六、二五四・六	五九、一六〇	三四八、一九一
同 四十四年	四、五八〇・六	五〇、八三九	三二四、六九七

年	作付反別	收穫高	價額
大正元年	四、一三八・一	四七、六五九	三四五、七〇三
同 二年	三、八〇七・三	六二、〇〇七	三七六、五四一
同 三年	三、七三三・二	五二、三一六	二八五、〇一〇
五ヶ年平均	四、四九八・八	五四、三九六	三三六、〇二八

種類、地方により其の名稱を異にするもの少なからず、従て品種名の如きは頗る多し

種	早生種	晚生種	計
早生種	五十二種		三十一種
中生種	五十七種		百四十種

右の中比較的栽培反別の廣き品種は「ムコダマシ」、金時、穗長、白粟、糯粟等なりとす

次に各郡中最も粟の栽培反別の多きは安房、君津二郡にして前者は七百三十五町

六四
 歩、後者は七百十一町二反歩なり、夷隅、東葛飾二郡之に亞き、何れも六百町歩
 内外にして匝瑳郡最も少なく僅に二町六反歩を示すのみなり

(二) 黍

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間の作付反別及收穫高の變遷次の如し、

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	一、二二三・四	一二、七七六	七八、一四一
同 四十四年	八七一・六	一〇、二一〇	六五、七二七
大正元年	八四六・〇	八、九六八	七一、三四四
同 二年	八二四・四	八、七四一	六七、五六六
同 三年	七二五・〇	八、二九五	五〇、五五五

五ヶ年平均

八九八・一

九、七九八

六六、六六七

種類、現今栽培せらるゝ品種は

早生種 十八種 中生種 十三種 晩生種 四種

合計三十五種にして其の栽培反別最も多きは山武、長生二郡とす、即ち前者は百七十五町四反歩、後者は百五十八町二反歩を占む、而して前表に示すが如く漸次其の作付面積は減少し、將來望少なき作物と云ふべし

(ホ) 蕎麥

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間の作付反別及收穫高の變遷を示せば次の如し

六五

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	三、六八三・八	二八、八三四	一六三、七四八
同 四十四年	二、九一三・九	二六、五五五	一四五、九〇八
大正元年	二、六四三・〇	一六、〇八五	一〇六、四六一
同 二年	二、五二一・〇	二〇、一五三	一三五、六八五
同 三年	二、四九二・六	二五、〇五〇	一三二、四一六
五ヶ年平均	二、八五〇・九	二三、三三五	一三六、八四四

六六

種類、現今栽培せらるゝ品種は三十三種にして其の栽培反別の多きは東葛飾郡の五百二十二町七反歩を最とし、山武郡四百三十八町三反歩、長生郡四百二十八町八反歩等之に亞き、而して山武、長生二郡に生産せらるゝもの古來名あり

(へ) 玉蜀黍

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間の作付反別及收穫高の變遷次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	五三二・六	八、三三五	三八、六八五
同 四十四年	四七五・八	七、八〇四	三三、三九二
大正元年	一、一四三・八	三〇、六八二	一九五、七九九
同 二年	九一〇・九	二一、四三八	一二四、三六四
同 三年	八七七・〇	二〇、五六八	八九、三六二
五ヶ年平均	七八八・〇	一七、七六五	九六、三二〇

種類、現今栽培せらるゝ品種は

早生種 二十八種 中生種 二十六種 晩生種 十一種
合計六十五種にして甲州種及馬齒種と稱する二品種最も廣く栽培せらるゝ、而して

六七

其の栽培の盛なるは印旛郡にして反別四百六十四町二反歩を有し、殊に同郡八街村、遠山村、富里村等は之が産地として名あり

以上の外雑穀として栽培せらるゝもの胡麻、蜀黍、稗等作付反別合計七百七十八町五反歩を算すれども逐年其の面積を減し他作に變更せらるゝの傾向なり

(ト) 大豆

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間の作付反別及收穫高の變遷を示せば次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	一八、二八六	一三四、九一四	一、一五六、八二〇
同 四十四年	一五、八二七	一一一、九六〇	一、一四二、三四六

大正元年	同 二年	同 三年	五ヶ年平均
一六、一八三・八	一七、五八八・二	一六、九八一・二	一六、九六〇・九
一四七、八四一	一五五、〇三〇	一三六、三〇三	一三七、二一〇
一、五四一、五三二	一、六〇八、四五六	一、三二三、九一五	一、三五四、六一四

種類、現今栽培せらるゝ品種は

早生種	五十三種	中生種	五十六種	晩生種	四十三種
-----	------	-----	------	-----	------

合計百五十二種にして最も廣く栽培せらるゝは

赤 菘、生 娘、目 黒、オイラン、青 柳、茶 豆、青 豆

等にして生娘、赤菘、青柳等就中品質良好なり、栽培反別の比較的多きは印旛、東葛飾二郡なれども概して大豆の作付面積は各郡大差なく、千葉、匝瑳、海上三郡を除けば孰れも一千町歩以上なりとす、而して市原、長生二郡より産出せらる

この従来品質優良の名あり殊に市原郡産青柳大豆と稱するは最も市場に好評あり

(子) 小豆

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間の作付反別及收穫高の變遷次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	二、四四〇・五	一六、一一九	一五九、一三三
同 四十四年	一、九八六・五	一一、六四七	一三一、三五八
大正元年	一、九〇七・六	一四、九八二	一八〇、七九二
同 二年	二、一五七・二	一六、六〇二	二〇九、〇一九
同 三年	二、〇八四・七	一五、〇〇八	一六四、五八六

五ヶ年平均 二、一五三

一四、八七二

一六八、九七五

種類、現今栽培せらるる品種は

早生種 三十九種 中生種 二十九種 晩生種 十九種

合計八十七種にして、金時、早生小豆、大納言、小納言等廣く栽培せらる

(リ) 落花生

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間の作付反別及收穫高の變遷次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	二、四〇七・九	七四、六九八	三九八、八一二
同 四十四年	三、〇三五・七	一一、一三三	五四八、四三四
大正元年	四、七四九・五	一五五、三六二	六八三、四五九

大正二年	三、九七九〇	一三三、七〇三	六七七、六三九
同三年	四、二七四・三	一七一、七二二	五六〇、〇二九
五ヶ年平均	三、六八九三	一二八、九六〇	五七三、六七五

二七一

更に大正三年度作付反別に就き各郡の状況を見るに其の栽培反別の最も多きは印旛郡の一千〇九十町歩にして、山武郡の九百三十九町七反歩、匝瑳郡の七百七十五町五反歩、海上郡の五百十五町歩等順次之に亞けり

栽培の沿革

本縣落花生栽培の起源は今を去ること四十年前明治九、十年頃にして、縣が獎勵に着手したるは明治十年時の縣令柴原和氏鹿兒島縣より種子を取り寄せ、縣民に諭告し之が栽培を勸奨したるを以て嚆矢とす、又民間にありては山武郡南郷村の

人牧野萬右衛門、明治九年二月神奈川縣三浦郡中里村より始て種子を購入し、之を郡内に栽培し頻に増殖を獎勵せりと云ふ、更に明治十一年に至りては匝瑳郡共和村の人金谷莊藏、曩に本縣より種子の下附を受けて之が栽培を試みたるに、土質最も適し頗る有利なる作物なるを知り熱心其の栽培を獎勵せり、斯の如く當局の指導と民間の獎勵と相俟ち漸次其の栽培區域を擴め、歲月と共に發達し縣下殆ど全般に栽培せられ、今や産額約六十萬圓に達し海外に輸出せらるゝもの其の八割を占むるの盛況に至れり、殊に本縣落花生の本場地たる干瀉地方に於ける栽培の基を開き、以て今日の隆盛を得るに至れるは即ち前記金谷莊藏氏の貢獻する所頗る多かりしなり、左れば明治十七年同地方各村民商議して落花生の碑を共和村

鎌數八幡神社内に建設し以て氏の功德を永世に追頌せり

七四

爾來落花生の栽培は漸次發達をなし遂に明治三十九年九月千葉落花生同業組合の設立を見るに至り益々品質の改良、販路の擴張は勿論生産販賣の方法を改善する等更に一層の進歩發達を企圖せり

種類、落花生の品種に關しては地方により區々隨意に名稱を附し其の數實に十六七種を算すれども要するに大別して立落花生及這落花生の二種に大別し、更に粒の大小により極大、大粒、中粒、小粒等に區別することを得べし、南京、相州等と名稱を附するものあれども種子の原産地を示したるものにして普通立落花生中に屬するものとす

本縣の落花生中最も品質の優良なるものを産するは匝瑳郡共和村及び同郡椿海村春海、海上郡嚶鳴村琴田、高生、香取郡古城村萬力中和村入野、米込等にして之を本縣落花生の本場地と稱し其の他の地方は總して之を脇場として一括せらる、而して本場物は多く内地に於て消費せらるれども海外に輸出せらるるものに就ては印旛郡産のもの最も聲價高し、其の賣品は所在の集合地に集合し鐵道により京濱間に輸送せらるるものなれども就中現下重なる集散地は海上郡旭町、山武郡成東町及印旛郡八街村、成田町等なりとす

附、落花生油

落花生油製造事業は明治十七年匝瑳郡共興村上屋常藏氏の創業を以て本縣に於け

七五

る嚙矢となす爾來落花生栽培の發達に伴ひ各地に製油業者を出し今や製油産額一年四萬圓以上を算するに至れり、而して之が生産者を擧ぐれば次の如し

匝瑳郡共興村	土屋製油場	海上郡銚子町	常世田徳太郎
安房郡館野村	小原謙二	山武郡片貝村	鈴木庄七
海上郡銚子町	大里庄次郎	同	東金町 中田芳松

其他豆數類には豌豆、蠶豆、菜豆及大角豆等あれども孰も作付反別は一千町歩内外或は以下にして其の産額、蠶豆を除けば皆拾萬圓以下なりとす

右の内蠶豆は比較的作付反別廣く且つ産額も從て多く縣外輸出額亦少なからざるなり、殊に東京市場に於ける本縣蠶豆の聲價最も高し

最近五ヶ年間に於ける蠶豆の作付反別並收穫高の變遷を示せば次の如し

年次	作付反別町	收穫高	價額
明治四十三年	一、五四二五	四九四、七一八	一四六、一三三
同 四十四年	一、六七九四	九八、八一〇	一八〇、三六三
大正元年	一、七七九〇	七三、四九七	一八四、六三八
同 二年	一、五七三七	七〇、四九七	二一六、八四〇
同 三年	一、四八四四	七八、九一八	一八四、五三一
五ヶ年平均	一、六一一八	六三六、五三五	一八二、五〇一

(又) 特用作物

本縣に於ける特用作物中最も生産額の多きは葉煙草にして菜種、花百合之に亞き其他實棉、七島蘭、(芷苳) 備後蘭、荏胡麻、絲瓜、葉藍、甘蔗、大麻、除虫菊、芋麻、杞柳等あれども孰れも産額極めて僅少なり

試に特用作物最近五ヶ年間に於ける作付反別並生産價額の變遷を示せば次の如し

年次	作付反別	生産額	年次	作付反別	生産額
明治四十三年	三、七三三	四二八、六八七	大正二年	二、九四九	六七、三八七
同 四十四年	二、七四二	四九五、八六六	同 三年	二、八七五	六七三、〇八九
大正元年	二、九二〇	六一、七四七			

更に以下特用作物中主なるものに就き記述せんとす

一、葉煙草

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間の作付反別收穫高の變遷次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	三、七三三	二、九四九	二二、〇九三
同 四十四年	二、七四二	二、八七五	二二、〇九三
大正元年	二、九二〇	二、八七五	二二、〇九三

年次	作付反別	生産額	年次	作付反別	生産額
同 四十四年	三、七三三	四二八、六八七	大正元年	二、九二〇	六一、七四七
大正元年	二、九二〇	六一、七四七	同 二年	二、九四九	六七、三八七
同 二年	二、九四九	六七、三八七	同 三年	二、八七五	六七三、〇八九
同 三年	二、八七五	六七三、〇八九	五ヶ年平均	四、三三四	二二六、〇九〇
五ヶ年平均	四、三三四	二二六、〇九〇			

前表に示すが如く作付反別、收穫高漸次増加し、專賣局の奨励と相俟て將來頗る好望なり、現今栽培せらるゝは東葛飾、香取二郡三十五ヶ町村にして就中東葛飾郡北部地方川間、木間ヶ瀬、二川、旭、七福等の各村最も盛なり
種類は專賣局の指定する所にして現今栽培せらるゝ品種は桐ヶ作一種に限られたり

二、菜種

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間の作付反別及收穫高の變遷次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	三、三〇二・八	二、三、九一二	二一九、二七九
同 四十四年	一、九七〇・八	二、二、〇〇三	二〇四、三五九
大正元年	二、二六八	二、三、八三〇	二四一、二八四
同 二年	二、二五八	二、三、七二八	二三七、七八〇
同 三年	二、〇一八・二	一、八、六八七	一七六、〇七三
五ヶ年平均	二、一〇八・九	二、一、四三二	二一五、七五五

本縣に於ける菜種は専ら畑作にして水田二毛作として栽培せらるゝもの僅に八十三四町歩に過ぎず而して菜種の栽培最も盛なるは海上、香取、千葉三郡にして海上郡推柴村、千葉郡譽田村等特に名あり

三、花百合

海外輸出品として栽培せられ安房郡最も多し、其他君津、夷隅、市原、印旛各郡に於ても多少之が栽培をなせり

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間の作付反別及收穫高の變遷次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	三、四・〇	一、一七、一三八	一一、八〇七
同 四十四年	四〇・八	二、六〇八、四一九	四〇、六三七
大正元年	四一・三	二、九三六、〇〇九	五四、〇七二
同 二年	三七・四	二、二五〇、五四二	三七、〇六五
同 三年	二三・〇	一、六九二、八三〇	七七、三八〇

作付反別は漸次減少すれども價額は年と共に増加せり、而して最も盛に栽培せらるゝは安房郡神戸村、九重村附近にして其の品種は主として鐵砲百合に屬す

(ル) 種 苗

本縣は種苗の取引市場たる東京及埼玉縣安行等に近く、之が供給地として相當の位置を有すれども蔬菜種子生産の状況を見るに多くは種苗商との特殊契約の下に行はるゝものなれば其の詳細を知るに由なきも印旛郡八街村附近、東葛飾郡及君津郡等の二三地方に於て牛蒡、胡蘿蔔、蘿蔔、白菜、其他の蔬菜種子を生産す苗類の生産に就は統計によりて其の概要を知るを得べく、其の最も多きは甘藷苗に

して、産額參拾萬圓に近く苗類總生産額の七割二分を占む、今試に各種、苗類に就き最近四ヶ年間に於ける生産價額の變遷を擧ぐれば次の如し

△果樹苗木及桑苗木

年次	果樹	桑	年次	果樹	桑
明治四十四年	三八二四	八、二五三	大正二年	一一、三四四	一一、九三六
大正元年	四、八一五	一、二、六四一	同三年	五、八九九	一八、〇五七

△蔬菜苗

年次	苗床面積	價額	年次	苗床面積	價額
明治四十四年	五〇一、六八六	三〇九、〇五六	大正二年	五五七、三六〇	三五七、一六四
大正元年	五〇五、三〇七	三四九、〇九五	同三年	五二六、八五八	三八八、四七〇

蔬菜苗中甘藷苗は其の産額特に多く且つ主要なるものなれど左に之が産額の變遷

を示さん

明治四十四年 一九八、七六五
大正元年 二四〇、一六九

大正二年 二六〇、一五九
同三年 二九四、七八〇

八四

而して甘藷苗の最も多く生産せらるゝは千葉郡(特に幕張、検見川、千葉、津田沼、二宮の各町村)にして大正三年度に於ける産額は八萬六千六百餘圓に上り印旛、香取(特に笹川町は古より産地として名高し)海上等の各郡之に亞けり、販路は縣内各地は勿論なれども亦遠く茨城縣及其他の府縣にも輸出せらるゝもの少なからざるなり

(オ) 綠肥用作物

本縣に於ける綠肥用作物としては青荊大豆、紫雲美、苜蓿及豌豆等を擧ぐるも唯

だ獨り紫雲美の君津、安房、市原、夷隅、長生等の各郡に亘り多少見るべきものあるに過ぎず今水田二毛作としての紫雲美の最近五ヶ年間に於ける作付反別の變遷及大正三年度に於ける各郡作付反別並一反歩平均收量を示せば次の如し

年次	作付反別	一反歩當收量	年次	作付反別	一反歩當收量
明治四十三年	七四八・一	四六二	大正二年	一、三八七・一	七二〇
同四十四年	一、〇五八・六	七一五	同三年	一、四三三・三	七〇九
大正元年	一、三四一・四	六四〇			
郡名	作付反別	一反歩當收量	郡名	作付反別	一反歩當收量
安房	三〇〇・五	六九一	山武	一・七	八九九
夷隅	一五七・一	七二九	市原	二七二・四	五六七
君津	五九〇・九	七八二	千葉	〇・二	二一〇
長生	六五二	六六〇	東葛飾	一・一	五五四

八五

印旛	〇・一	一、〇〇〇	八六
香取	二三八	七〇一	
海上	一〇・二	八二五	
合計		一、四三三・二	七〇九

以上の如く土地の状況により殆ど二毛作を行ふこと能はざる所頗る多きも亦既往各年の状態に見るときは逐年増加の傾向あり

(ワ) 茶

本縣に於ける茶は其の作付面積年と共に減少の状態にあり、従て製茶の如きも之を他府縣に輸出するもの少なく、大部分は縣内消費用に供せらるゝが如し

作付反別並製茶産額
最近五ヶ年間に於ける作付反別及製茶産額の變遷を示せば次の如し

年次	作付反別町	製茶數量	同上價額
明治四十三年	八一九・九	七四、三三八	一五八、二四九
同四十四年	九二九・〇	九九、三一九	二一〇、四九三
大正元年	九〇二・八	一、四、七三三	二六〇、八九一
同二年	八三四・七	一〇八、一二六	二二九、二七二
同三年	七六八・一	九六、五七一	二二六、三三三
五ヶ年平均	八五〇・九	九八、五九七	二二七、〇四五

右の内作付反別の最も多きは印旛郡にして全面積の三割餘を占め殊に入街、富里等の各村に於て其の栽培盛なり

製茶製造戸數は大正三年度に於て工場二百四十五戸、自宅三萬〇八百戸合計三萬一千〇四十五戸にして漸次増加しつつあり

(カ) 蔬菜類

作付反別並價額

最近五ヶ年間に於ける作付反別及生産額の變遷を示せば次の如し

年次	作付反別	價額	年次	作付反別	價額
明治四十三年	六四、八六一・九 ^町	六、九七二、六七九 ^円	大正二年	六一、八二〇・二 ^町	一一、〇三二、九二二 ^円
同 四十四年	五八、八九三・五	八、一五八、二〇五	同 三年	六一、三一八・〇	八、七八六、二五四
大正元年	六〇、六二〇・六	九、九二二、三五九			

以下蔬菜類中の主なるものに就き記述すべし

一、甘 藷

甘藷は作付反別頗る廣く蔬菜類總作付面積の約四分之一を占め本縣夏作物中第一位

にあり之が豊凶は農家經濟の消長に關する所極めて大に而も其の大部分は普通作物として取扱はれつゝあれども便宜上本項中に記載せり

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間の作付反別及收穫高の變遷次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	一三、四四三・八 ^町	三七、六一九、七八八 ^斗	一、七六八、八二二 ^円
同 四十四年	一三、七四一・五	四五、八一八、一七六	二、四七六、五三四
大正元年	一四、三五四・六	五二、一四一、〇五八	三、二一四、七一〇
同 二年	一五、三四〇・九	六〇、二一八、九一四	三、七九四、三三五
同 三年	一五、四七五・〇	六七、九三一、六九四	二、四三七、六五一
五ヶ年平均	一四、四七一・二	五二、七四五、九二六	二、七三八、四一〇

前記の如く其の作付反別、收穫高孰れも年と共に漸次増加の傾向あり、而して大正三年度に於ける各郡の状況を見るに其の栽培反別最も多きは千葉郡の三千七百五十七町歩、東葛飾郡の二千四百四十町四反歩にして海上、香取、印旛三郡順次に亞けり

九〇

栽培ノ沿革

本縣に於ける甘藷の栽培は其の起源頗る古く遼漠として詳細を知るに由なきも古老の傳ふる所に依れば青木昆陽幕府に献白して享保二十年、薩摩國より種子を取寄せたる時、下總國千葉郡幕張町字馬加及上總國山邊郡不動堂村（現山武郡綠海村）に試作したるを以て嚆矢とをすが如し、其當時農民は有害植物となし栽培する

もの甚だ少なかりしが天明年間の飢饉に際し獨り甘藷ありたる爲め、人民の餓死を免れたるもの多かりしを以て一般に有益の作物なることを覺り漸次栽培區域擴張せられ爾來年と共に増加し遂に今日の如く發達するに至れり、されば弘化三年十二月千葉郡幕張町附近町村民相謀り幕張町字寺口に祠を建設し昆陽の功德を頌し諸神社と尊稱して年々祭典を舉行しつゝある、亦以て故なきにあらざるなり

主産地

千葉郡 都賀村、幕張町、檢見川町、二宮村、大和田町
海上郡 銚子町、高神村、富浦村、豊浦村、嚶鳴村
匝瑳郡 芝興村、榮村

東葛飾郡 八榮村、鎌ヶ谷村、法典村、八柱村、高木村、船橋町、葛飾村
主なる品種

金時(大正赤と稱す)足立、青莖、肩拔、八房、中富、四十日、鹿兒島、早生相州、下總白、五葉赤、高根赤、オイラン、丹島(新島)、蔓無し

二、馬鈴薯

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間の作付反別及收穫高の變遷次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	一、〇三三・六	二、二〇〇、三八七	一五二、三〇四
同 四十四年	九三二・四	二、八六四、〇六二	一五二、〇一五
大正元年	八一一九	二、一四一、〇六五	一三六、八五一

同 二年	六六六・二	二、一五〇、三三七	一二八、七七二
同 三年	五八九・九	一、七八七、四六六	一一五、八三〇
五ヶ年、平均	八〇六・四	二、二二八、六四一	一三六、九五二

各郡中栽培面積の最も廣きは千葉、印旛二郡にして前者は百三十九町四反歩、後者は百十七町一反歩なり、而して前記甘藷栽培の漸次増加し澱粉製造用として甘藷の需用盛なるに従ひ本品の生産額は逐年減少するに至れるなり

主産地

千葉郡 千葉町附近、(千葉町、都賀村、蘇我町)

印旛郡 八街村附近

主なる品種

金時、アトリローズ

三、里 芋

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高の變遷次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	二、三三三〇	四、九一四、四〇一	三三八、四五九
同 四十四年	二、六三七七	八、四三三、四二三	五〇九、五八〇
大正元年	二、三四六九	七、〇八九、九二六	五二三、七七八
同 二年	二、二九一三	七、四七〇、〇九七	五六七、七九〇
同 三年	二、三〇六一	六、八八二、八二三	四五八、一九七
五ヶ年平均	二、三三九〇	六、九五七、九三四	四七九、五六一

各郡中最も栽培面積の廣きは印旛郡の五百三十八町一反歩にして東葛飾郡四百八

十九町二反歩千葉郡三百八十三町歩之に亞き、印旛郡産のもの市場に名あり

主産地

- 印旛郡 八街村附近
- 千葉郡 譽田村、大和田町、犢橋村、都賀村、幕張町
- 東葛飾郡 川間村附近
- 長生郡 長柄村
- 安房郡 千歳村

主なる品種

早生馬鹿、鳩ヶ谷、赤芽

四、蘿蔔、胡蘿蔔
作付反別並收穫高

年次	蘿蔔			胡蘿蔔		
	作付反別	收穫高	價額	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	二、七三四五	一八、九一七、八一九	四七五、〇五六	四三五、八	一、一二、五〇〇	八六、三八二
同 四十四年	二、四三二五	二一、八五九、二七〇	四七七、〇五八	二六七、六	八一九、〇九六	九六、五九〇
大正元年	二、二九〇八	一六、九〇九、三〇三	五八三、一一七	二六三、七	七五三、五七一	六七、八三三
同 二年	二、三三六一	一九、一七三、八九四	六六五、〇八五	二七五、〇	九三四、八四四	八三、六一六
同 三年	二、三四四二	一八、一五七、七六〇	五四七、〇九一	二六九、九	九五二、五七九	七四、三一八
五ヶ年平均	二、四二一六	一九、〇〇三、四〇九	五四九、四八一	三〇二、四	九一四、五一八	八一、七四八

蘿蔔にありては東葛飾郡其の反別最も多く七百十一町七反歩にして總面積の殆ど三割を占め胡蘿蔔にありては各郡概して大差なきも東葛飾郡五十一町九反歩第一位に居れり

主産地

東葛飾郡 松戸町、市川町、八柱村、國分村、明村、中山村、葛飾村
 八榮村、鎌ヶ谷村
 印旛郡 根郷村、八街村
 君津郡 秋元村
 夷隅郡 總野村、上野村、東海村
 千葉郡 千葉町附近、都賀村、譽田村、檢見川町

主なる品種

(大根) 練馬尻細、練馬丸尻、徳利、二年子、龜戸、方領、聖護院

宮重、美濃早生

(胡蘿蔔) 東京大長、瀧ノ川、札幌、金時、三寸

五、牛 莠

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高の變遷次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	六一九・八	一、五七九、二五六	一三八、六九四
同 四十四年	四四七・二	一、五七一、三三四	一三三、七〇一
大正元年	四三三・八	一、五六九、三九三	一四〇、三五四

同 二 年	四九七・六	一、九四九、五三三	一八六、三四六
同 三 年	四六八・三	一、七五〇、一四六	一五九、七七七
五ヶ年平均	四九一・三	一、六八三、九三二	一五一、七七四

最も栽培面積の廣きは印旛、東葛飾二郡にして前者は八十三町四反歩後者は八十
三町歩を有せり、最も少きは匝瑳郡なれども本郡には古來有名なる大浦牛莠の生
産地たる匝瑳村あり市場に其の名高し

主産地

千葉郡 譽田村、千城村、更科村、都賀村

印旛郡 根郷村、八街村

匝瑳郡 匝瑳村

東葛飾郡 松戸町、八柱村、國分村、手賀村
主なる品種

六、蓮 根 瀧ノ川、大浦、砂川、梅田

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高の變遷を示せば次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	一三九六	三五〇、四三六	七三、八四二
同 四十四年	一四一七	三六二、四一二	八〇、六八四
大正元年	一五八三	五六二、八八〇	一〇六、〇一一
同 二年	一四四九	四九五、三二八	一〇三、一〇〇

同 三年 一三五六
五ヶ年平均 一四四〇

四七〇、四八八
四四八、三〇七

九三、六九六
九一、四六七

栽培の最も盛なるは君津郡にして反別三十九町歩を有し木更津町附近生産のもの
市場に名あり、他は概ね十五六町歩以下なりとす

主産地

君津郡 木更津町、岩根村、清川村、根形村

匝瑳郡 福岡町

東葛飾郡 中山村、八幡町

主なる品種

天王蓮(早生)、 晩生天王蓮、 支那蓮

七、葱

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反收穫高次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	六一五・九	一、七三二、八四八	二一三、九九九
同 四十四年	六九二・八	二、五九八、三八八	二五四、六四四
大正元年	五六二・九	二、一〇四、九九一	二二二、四四六
同 二年	五九九・八	二、三三一、八五六	二六二、〇五八
同 三年	五七六・一	二、三三六、〇三六	二二九、〇五一
五ヶ年平均	六〇九・五	二、二二〇、八二四	二三六、五〇〇

栽培の最も盛なるは東葛飾郡にして反別二百町歩を有し總面積の三分の一を占め東京市場に輸出せらるゝもの頗る多し、他は孰れも五六十町歩以下なれども君津

郡本更津町近附及匝瑳郡産のもの稍市場に名あり

主産地

- 東葛飾郡 松戸町、市川町、八柱村、國分村、明村、八榮村、船橋町
- 君津郡 清川村、岩根村
- 匝瑳郡 須賀村
- 長生郡 東郷村、八積村
- 千葉郡 生實濱野村

主なる品種

- 千住黒穀、千住赤穀、鹽田葱(千葉郡産)

八、菘

作付反別並收穫高

菘類には種類多きも便宜上總括して其の最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高を擧ぐれば次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	五七二・九	二、三六三、五六六	一二七、二四九
同 四十四年	五二五・一	二、七九八、一二七	一二三、七二七
大正元年	五〇五・一	二、四九一、五五〇	一二七、七一五
同 二年	五〇二・七	二、六五〇、四八一	一三九、〇二二
同 三年	五一三・六	二、八四〇、二七二	一二九、七二八
五ヶ年平均	五二三・九	二、六二八、七九七	一二九、二八六

各郡に於ける栽培反別は最も多き東葛飾郡の九十五町一反歩より最も少き匝瑳郡

の十二町六反歩の間にして特に大差なきも、東葛飾郡にありては東京市場に供給するが爲め前記の如く比較的其の反別廣し、近時千葉郡千葉町、都村、白井村、千城村等其他各郡各地に白菜の栽培所漸次増加したれども未だ市場に顯はるゝに至らず

主なる品種

- 小松菜、高菜、芥菜、體菜、京菜、三河島菜、芝菜白菜、直隸白菜
- 山東菜

九、南 瓜

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高次の如し

年次 作付反別 收穫高 價額

明治四十三年	五五六・四	一、七三九、九八六	一三三、〇三九
同 四十四年	五一七・〇	二、一三一、九七六	一七五、四七三
大正元年	五〇八・八	二、二三一、二八九	一九七、〇四七
同 二年	五二六・八	二、四〇〇、四〇〇	二二七、八八六
同 三年	五六二・六	三、〇三三、一七一	二七五、二四〇
五ヶ年平均	五三四・三	二、三〇七、三六四	二〇三、五三七

栽培反別の廣きは君津郡及東葛飾郡にして前者は百三十八町八反歩、後者は百〇三町四反歩なり、然れども市場の聲價高きは君津郡富津町附近及匝瑳郡干潟地方なりとす

主産地
 君津郡 富津町、青堀村、飯野村、清川村、岩根村

匝瑳郡 共和村、豊畑村、共興村、野田村、榮村
 安房郡 神戸村、那古町
 東葛飾郡 市川町、松戸町、國分村

主なる品種
 菊 座、縮緬(本種に大小の別あり) 内 藤、雜種

一〇、西 瓜
作付反別並收穫高
 最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	三〇五・七	八六一、四九七	九三、一三二

明治四十四年 二二四・一
 大正元年 一七九・三
 同 二年 一九八・四
 同 三年 二八〇・九
 五ヶ年平均 二二七・七

八九六、六六六
 七三二、五三六
 九六〇、九八五
 一、七五八、一五六
 一、〇四一、九一八

一〇八、一五〇
 九八、三八三
 一三八、七三四
 二〇一、六八一
 一三八、〇一六

一〇八

特に栽培面積の多き所なきも千葉、東葛飾、印旛の三郡比較的其の反別多し、而して匝瑳郡干潟地方に産するもの古來品質優良なるを以て名あり

主産地
 匝瑳郡 干潟地方
 千葉郡 千葉町、 検見川町、 譽田村、 津田沼町
 市原郡 八幡町附近

君津郡 富津町

主なる品種

黒皮(在來種にして早生、晩生の二種あり)
 アイスクリーム、 マウンテンスウポート、 サイベリア

一、瓜 類

作付反別並收穫高

胡瓜、白瓜、越瓜、甜瓜の四種を總括して之が最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高を擧ぐれば次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	一、〇五二・六	二、七六八、二四九	二五五、六八〇
			一〇九

明治四十四年
 大正元年 八〇四七
 同二年 七六一四
 同三年 七七八七
 五ヶ年平均 七九八〇
 八三九一
 三、〇二五、二六三
 三、一六五、一五〇
 三、三〇三、一八六
 三、八〇三、八六一
 三、二一三、一四二
 二八八、八七〇
 三一七、五四九
 三五二、四二六
 三八六、〇〇二
 三二〇、一〇五

右四種の中胡瓜最も多く總反別約四割を占め、白瓜、甜瓜は其の反別伯仲の間
 あり越瓜、最も少し、又各郡中栽培の最も盛なるは東葛飾郡にして印旛、山武郡
 等之に亞けり

主産地
 東葛飾郡 松戸町、船橋町、八柱村、國分村、八榮村、鎌ヶ谷村、法典村
 海上郡 千歳に含まるゝ町村

長生郡 白潟村、東郷村、高根本郷村、南白龜村、八積村
 安房郡 平群村、船形村、瀧田村、岩井村、那古町、北條町、神戸村
 千歳村

主なる品種
 (胡瓜) 青大胡瓜、節成(本種に三枚目節成、花白、黒皮等あり)
 (越瓜) 東京大越瓜、(甜瓜) 梨瓜、銀甜瓜、金甜瓜

一、二、茄子
作付反別並收穫高
 最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	一、〇七九二	三、〇七六、九七三	二二四、一三四

明治四十四年	七九五・二	三、五三四、九五四
大正元年	八四五・一	三、九六六、四八五
同二年	八四三・七	四、〇一八、九四七
同三年	八三四・〇	四、二三八、四一五
五ヶ年平均	八七九・四	三、七六七、一五五

作付反別の最も多きは香取郡にして百三十一町三反歩を有し印旛郡の百十一町九反歩、東葛飾郡百〇九町二反歩等順次之に亞けり

主産地

東葛飾郡 松戸町、船橋町、國分村、八柱村
主なる品種

蔓細千成、早生山茄、中生山茄、眞黒茄、清國圓

一三、其他の蔬菜

以上列記したるもの、他は孰れも其の産額拾萬圓以下にして生産地の如きも比較的一二地方に偏在し一般的の作物と認められざるもの少なからず、試に大正三年度に於ける是等各種蔬菜類の作付反別、生産價頭及主産地を示せば次の如し

蔬菜名	作付反別	生産價額	主産地
野蜀葵	一三五・三	五八、一六二	東葛飾郡 松戸、市川、八柱、國分、明、各町村
玉葱	七・六	三、八九一	山武郡 正氣村 市原郡 東海村 東葛飾郡 手賀村附近
薑葱	一三五・八	六八、七五一	香取郡 古城村、萬歳村 東葛飾郡 東郷村、白湯村、一松村

獨	薯	辣	蕃	蒟	蕪	冬	蕃	筍	生	甘
活	積	蕪	藪	玉	菁	瓜	茄	合	百	藍
一六〇	一一〇	三四四・九	二〇二	三八〇	八四・七	二九〇	一一	四五・三	一三・九	一六・二
五、八二二	八、六一三	八一、二二六	五、六九四	二七、〇六六	一八、九七九	一一、五八一	九二八	一六、六八三	八、二〇〇	九、四一九
印旛郡 八街村	印旛郡 東郷村	印旛郡 香取郡 清川村、岩根村	東葛飾郡 印旛郡	印旛、香取、山武三郡	香取郡	山武郡 千葉郡	東葛飾郡 松戸町、八柱村	印旛郡 夷隅郡	印旛郡	千葉郡 香取郡 君津郡

其他安房郡の花耶菜、蠶豆、莢豌豆、東葛飾郡の石刀柏、印旛郡及匝瑳郡の芹、君津郡の慈姑等は産額多からざるも市場に名あり

一四、促成栽培

本縣に於ける蔬菜の促成栽培は安房、東葛飾二郡に行はれ、其生産物は東京、横濱或は大坂等の市場に販路を有し近時漸く盛大ならんとす、殊に安房郡に於ける促成栽培は其の起源古く明治二十八年萬里小路伯爵の主唱に依り、安房國農會にて子爵福羽逸人氏を聘し、斯業に關する講話會を開催し、之が結果萬里小路伯爵率先して栽培を開始したるを以て嚆矢となす、爾來各地に普及し今や北條、平群、瀧田、神戸、那古、船形、岩井等の各町村に亘り、従業戸數百三四十戸に達し框

數一千五百個以上、生産額八千五百圓を算するに至り、其の殆ど全部は京濱地方及京都、大阪等の市場へ移出せり、現今栽培するは胡瓜及茄にして其他「アスパラガス」の如き岩井村に多少栽培する者あれども未だ其の産額多からざるなり、而して胡瓜は收穫高三十萬個以上、其の價額六千七百圓を越へ、茄子は收穫高九萬六千個にして價額一千七八百圓に上れり

前記各町村中栽培の最も盛なるは平群、瀧田兩村にして其の生産價額六千參百圓以上に上り總生産額の殆ど八割を占むるの狀況なり、之か爲め去る明治三十九年平群、瀧田、丸三村を區域とし、促成栽培の改良發達を圖るの目的を以て安房園藝組合を組織し技術の改善、販路の擴張に努め、更に大正二年十月、組織を改め

産業組合法に依り有限責任安房園藝生産物販賣組合と改稱し益々販賣方法の改良を圖り市場に於ける聲價漸く高く、將來益々發達せんとす

東葛飾郡にありては八榮村、新川村等に一二の栽培者あれども其の産額多からず且つ市場に於ける位置亦安房郡の比にあらず

(三) 果樹類

本縣に於ける果樹の主なる種類は梨、柿、柑橘、栗、枇杷、梅、桃、葡萄等なりとす、今最近五ヶ年間に於ける是等果樹類の作付反別及收穫高を見るに孰れも年と共に増加の傾向あり將來益々有望なり即ち其の變遷を示せば次の如し

年次	作付反別	樹數	價額
明治四十三年	二、四九八九	一、五三三、三九七	六〇八、六四五

明治四十四年	一、九二八・九	一、三三一、八九五	一一八
大正元年	一、九八一・七	一、四二七、三三一	四七七、八〇四
同 二 年	二、一〇八・七	一、五一七、〇八七	五九九、七三五
同 三 年	二、二〇五・九	一、六八七、七七七	六九五、〇九二
五ヶ年平均	二、一四四・八	一、四九九、四九七	五九二、八〇四

以下主なるものに就き記述すべし

一、梅

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	三四四・二	一七、〇九四	六六、四三五

同 四十四年	二七五・七	一一、六一八	五二、五九九
大正元年	二八六・三	一三、二〇四	五八、八五六
同 二 年	二五三・二	一一、六七二	五八、五八三
同 三 年	二三四・六	一一、四二五	五五、六八〇
五ヶ年平均	二七八・六	一三、四〇三	五八、四三一

各郡中作付反別の最も多きは東葛飾郡及君津郡にして前者は三十五町七反、後者は三十四町六反なり、兩者何れも東京に輸出し殊に君津郡よりは梅干として販賣せらるゝもの少なからず

主産地

- 東葛飾郡 各町村
- 君津郡 清川村、中 村、貞元村、岩根村、關 村

市原郡 東海村、千種村

主なる品種

豊後、養老、白加賀、香花實

二、桃

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	二二二・五	三七七、〇二〇	五一、七四〇
同 四十四年	一八一・四	一七一、六三六	二七、二五一
大正元年	一六一・一	一五五、八一六	三〇、四九二
同 二年	一六八・六	二八一、三三八	三八、一九〇

大正三年
五ヶ年平均

一六五・〇
一八一・七

一八八、一五三
二三四、七九三

三五、六八七
三六、六七二

作付反別年と共に減少すれども收穫高及價額は漸次増加するの傾向あり、作付反別の多きは東葛飾、安房二郡にして前者の五十八町五反歩、後者の三十四町歩を合計したる九十二町五反歩は縣下桃作付總面積の五割以上に當れり而して又前記兩郡産のもの東京、横濱等の市場に於て聲價高し

主産地

東葛飾郡 中山、大柏、七福、川間、八幡、市川、野田
 新川、各町村
 安房郡 神戸村、那古町、富浦村

市原郡 東海村、千種村、姉ヶ崎町
君津郡 岩根村、竹岡捲

主なる品種

天津、上海、アムステルダム、傳十郎、土用水蜜、離核、早生水蜜
アメリカ二十四號

三、梨

作付反別並收穫高

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	二九八九	六六三、七六九	一三一、七四九
同 四十四年	二九六七	四九一、五三七	一一五、四一三
大正元年	三三一〇	八一、三五二	一五七、二八五

年次	作付反別	收穫高	價額
同 二年	三六九七	一、〇七〇、二四六	一八二、八四五
同 三年	四二二九	七七九、二五三	一六九、三九二
五ヶ年平均	三四一八	七六三、二三一	一五一、三三七

本縣に於ける梨は殆ど全部日本梨にして西洋梨は僅に一二町歩に過ぎず、而して各郡中其の栽培の最も盛なるは東葛飾郡にして約二百町歩に達し總面積の五割を占む、安房郡及市原郡之に亞き前者は五十九町七反歩、後者は三十二町一反歩を有せり、而かも本縣の梨は前記の如く年と共に栽培面積を増加し將來益々有望なり、東京市場に於ける東葛飾郡八幡ノ梨、安房郡豊田村附近の梨等最も名あり

主産地

東葛飾郡 中山、大柏、國分、八柱、明、八幡、市川

行 徳、各町村

安房郡 館野村、豊田村

市原郡 東海村、千種村、姉ヶ崎町

長生郡 東浪見村、太東村、白湯村

匝瑳郡 共和村

主なる品種

長十郎、幸藏、早生赤、眞鍮、赤穂、太白、上花、
今村秋、晩三吉、廿世紀、太平

四、柿

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	七四四九	一、五三一、〇六二	一五四、三〇九
同 四十四年	四三三四三	四五二、一八六	七二、三〇八
大正元年	四五三三	七八八、四九九	一一〇、六二八
同 二年	四七五〇	八七二、一〇二	一二六、四一三
同 三年	四七二二	五七一、九四四	八〇、一一四
五ヶ年平均	五一五九	八四二、九五九	一〇八、七五四

作付反別の最も多きは君津郡にして七十二町二反歩を有し、印旛、市原二郡之に
亞き前者は六十八町五反歩、後者は六十五町八反歩なりとす、其他長生、安房、東
葛飾、山武、夷隅等各郡順次之に亞けり
本縣の柿は大部分樽柿として京濱市場に移出せられ殊に君津郡産のもの其の聲價

高し、白柿の製造は君津、夷隅、市原郡に於て稍盛なれども未だ市場に於て甲州
其他先進諸縣に及ばず

主産地

- 君津郡 環、駒山、關、豐岡、松丘、天神山、龜山各村
- 印旛郡 千代田村、和田村
- 市原郡 市東村、市西村、内田村
- 夷隅郡 老川村、西畑村
- 長生郡 茂原、本納、長柄、廳南各町村
- 安房郡 大山村、主基村

山武郡 源村、日向村、大和村

主なる品種

- 山衣紋、紅衣紋、百目、鶴ノ子、大澁、有樂、中村、
- 板谷、霜コネリ、黒熊、禪寺丸、甲州丸、富有、妙丹、
- 青蜂屋、赤蜂屋、種子無シ、御所

五、枇 杷

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反別及收穫高次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	一三五・四	二二九、四九八	五四、二六八
同 四十四年	一三六・八	一七九、〇〇五	三三、九一六

大正元年	一二八・八	一六九五〇八	三六、一五七
同二年	一五七・一	二二五、四四二	五九、二一一
同三年	一四二・八	二二五、三三三	五五、四三七
五ヶ年平均	一三八・二	二〇五、七五五	四七、七九八

枇杷の栽培は近時著しく増加したれども其の栽培地は殆ど安房郡の二三地方に偏局し其他の郡にありては孰も僅に三四反歩を出でざるのみなり、即ち安房郡に於ける作付反別は百二十町歩餘にして總面積の約九割を占むるの状態にあり

主産地

安房郡 富浦村、岩井村
 君津郡 金谷村、竹岡村

東葛飾郡 中山村

主なる品種

在來種、田中、楠、福壽院、太錦、曙、富ノ基

六、葡萄

作付反別並收穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反別並收穫高次の如し

年次	作付反別	收穫高	價額
明治四十三年	三四・一	四七、七九二	六、八五二
同四十四年	四八・三	七六、六四八	一一、五六一
大正元年	五三・六	一三四、二四七	三三、一九〇
同二年	六一・二	二二八、九九三	三〇、〇一一

大正三年
五ヶ年平均

七〇・七
五三・六

二一六・六六六
一四〇・八六九

一三〇

葡萄も亦近時著しく栽培面積を増加したれども其の栽培區域は殆ど東葛飾郡に限られ、反別六十町歩に達せり

主産地

東葛飾郡 大 柏、中 山、國 分、八 柱、八 幡、市 川、
我孫子、各町村

主なる品種

カトウバ、レデールワシントン、チャンピオン、ナイヤガラ、デラウエア、ゼツシカ

七、柑 橘 類

柑橘類の主なるものは密柑、ネーブルオレンジ、夏橙等にして是等各種柑橘類の最近五ヶ年間に於ける作付反別並收穫高の變遷を示せば次の如し

年 次	作付反別	收 穫 高	價 額
明治四十三年	四八五・四	九八三、一〇八	一〇三、二七二
同 四十四年	三九七・六	八八六、七五八	一一四、六三五
大 正 元 年	三九五	九一八、六八一	一二三、三〇二
同 二 年	四四〇・〇	一一二七、四一六	一三七、五六三
同 三 年	五〇三五	八七一、五〇一	九八、一九四
五ヶ年平均	四四五・二	九七五、四九三	一一五、三九三

本縣に於て柑橘類の栽培最も盛なるは君津郡及山武郡にして孰も作付反別八十町歩以上を有し、安房郡及長生郡之に亞き市原、夷隅二郡は遙に下れり、其他の郡

に至りては孰も僅に十五六町歩以下なりとす、近時栽培反別漸次に増加し、従て
縣外に輸出すもの亦多く、本縣の果樹類中梨に次て其の生産最も多し

主産地

君津郡 吉野、佐貫、岩根、湊、周南、竹岡、清川、
 眞丹、各町村
 山武郡 正氣、増穂、大和、東金、各町村
 安房郡 曾呂村、平群村、岩井村、大山村
 長生郡 八積村、高根本郷村、東郷村
 市原郡 東海村、千種村
 夷隅郡 長者町、中根村、古澤村

主なる品種

夏 橙、日向夏橙、天狗柑、伊豫蜜柑、旭柑、ワシントンネーブル、
 トムソンネーブル、温州、白輪

八、栗

作付反別並収穫高

最近五ヶ年間に於ける作付反別並収穫高次の如し

年次	作付反別	収穫高	價額
明治四十三年	一五・四	七、一四九	二五、一八一
同 四十四年	九四・四	四、八一〇	三五、三九三
大正元年	九四・六	四、六四七	四三、〇五一
同 二年	一〇〇・四	四、〇四七	四三、二三六
同 三年	一〇九・〇	三、七七六	四七、八二二

五ヶ年平均

一一〇〇

四、八八六

一三四

栗は印旛、東葛飾、市原三郡に最も多く其の作付面積孰も十八町歩以上にして千葉、山武二郡之れに亞き何れも十四町七反歩を有せり、近時各地に栗の栽培、漸次に勃興し、將來有望なるものに屬せり

主産地

印旛郡 公津村、遠山村

千葉郡 譽田村

東葛飾郡 川間村附近

山武郡 源村

主なる品種

盆栗、芝栗

以上の他、李、杏、無花果、柘榴、銀杏、苹果、櫻桃等、各地に多少栽培せらるれども其産額甚だ少く其中最も多き李に於ても尙ほ壹萬四五千圓に過ぎず況んや其他のものに至りては推して知るべく、而かも是等のものは多く地方に於て消費せられ縣外に輸出せらるゝが如きは殆ど稀なり

五、農業上の施設

(1) 害虫驅除豫防

沿革

明治二十九年三月害虫驅除豫防法發布後直に縣令を以て同施行規則を制定したれども未だ其の實際上には何等施す所なかりしなり、故に越へて明治三十五年縣農會に於て害虫驅除豫防委員設置規程に依り同委員を各郡に囑託設置し實際の業務に當らしめたるを以て本縣に於ける施設の嚆矢と認むべし、其後明治三十九年三月害虫驅除豫防法施行規則、害虫病菌又は蟲類以外の有害動物の種類及驅除豫防方法を定め更に同四十一年五月害虫驅除豫防委員規程、同四十五年五月螟卵採取獎勵規則等により縣郡、町村に委員を設置し之か驅除豫防を強制すると共に獎勵の道を講じ以て今日に及べり

現況

前記各規程により現今驅除豫防に努めつゝあるは水稻の害虫二化性螟虫及浮塵子にして専ら苗代時期に於て捕蛾、捕蟲、採卵等により之が驅除を行ひ殊に螟卵採取獎勵規則により各町村に獎勵金を交付して採卵の獎勵を行ひつゝあり

經費

明治四十一年以降に於ける害虫驅除豫防費次の如し

年次	經費金額	同上ノ中螟卵採取獎勵費	年次	經費金額	同上ノ中螟卵採取獎勵費
明治四十一年	三、〇七九、九八〇	四、七三一、二九〇	大正元年	四、七三一、二九〇	一、八四二、一〇〇
同 四十二年	四、三三二、一九〇	三、七〇六、四六〇	同 二年	三、七〇六、四六〇	二、〇四七、〇〇〇
同 四十三年	四、二七〇、三八〇	四、一四〇、〇四〇	同 三年	四、一四〇、〇四〇	二、三五四、〇〇〇
同 四十四年	一、六七五、五七〇	四、五三六、〇〇〇	同 四年	四、五三六、〇〇〇	二、四〇〇、〇〇〇(算)

(口) 水稻採種田

沿革

本縣の稻の品種は極めて雜駁多數にして殆ど一千種に近く之が爲市場に於ける商取引上にも不便多く従て價格に影響を及ぼし品種の統一及改良を圖るの必要急なりしを以て明治四十四年度より水稻採種田を各郡に委託設置し本縣獎勵品種を栽培せしめ是等擔當者より毎年七百石乃至九百石の種粃を買上げ當業者に無償を以て配布せり

是より先き縣は採種田設置の準備として各郡に原種試驗地を設置し以て本縣の風土に適應する優良品種の選定に著手し爾來三ヶ年間試驗の結果左記十一種を選抜

し本縣獎勵品種として決定せり

- 早生種 信州、信州金子
- 中生種 愛國、關取、大和錦、近江、高砂
- 晩生種 神力、竹成、メ張、蟹目

其の後右の中信州金子、大和錦、高砂、蟹目の四種を配布せざるを以て現今配布するものは七品種となれり

事業の経過

採種田設置以來の事業の経過次の如し

年次	經費豫算	採種田反別	耕作人員	種粃買上數量	種粃配布人員
明治四十四年	一五、〇九四	三四・六	一三四人	九〇二・六五五石	一一、一九一人
大正元年	一四、八四二	三四・二	一〇〇人	七七七・三五一	九、五〇〇人

大正二年	一四、四一一	三四・六	一六六	七九〇、八〇〇	一〇、三三九
同三年	一三、三三三	二六・〇	九五	八〇四、八九〇	一一、二七五
同四年	九、八八八	二〇・〇	七四	六六九、八〇〇	
成績					一四〇

種籾の配布は良品種の普及によりて産米の品位を向上せしめ且つ其の産額の増加を圖らしむるに在り
 今左に奨励品種作付面積増加の一斑を示し之が普及の程度より其の効果を推知するの資に供せんとす

品名	採種田設置前	同設置四年後 (大正四年)	増加セシ反別
愛國	一五、八九八・〇	二一、〇九三・一	五、一九五・一
神力	八、〇八九・五	一一、五五八・九	三、四六九・四

竹成	七六九・七	三、六八二・九	二、九一三・二
大和	六六〇・五	三、三七八・一	二、七一七・六
關取	二、三三七・〇	三、〇四二・三	七〇五・三
×張州	七一三・九	二、〇五七七	一、三四三・八
信州	一、三三三・五	一、九四〇・三	六二六・八
高砂	二六〇・六	一、七四一・〇	一、四八〇・四
近江	二三四・二	一、三九一・四	一一、一五七・二
信州	二二八・〇	一、〇八七・三	八六九・三
蟹目	四八三・三	八八四・〇	四〇〇・七
合計	三〇、九八八・二	五一、八五七・〇	二〇、八六八・八
水稻作付總反別	一〇三、四二二・二	一〇四、八八六・五	
同上ニ對スル獎勵品種	二割九分九六	四割九分四四	
同上ニ對スル獎勵品種	九四、九六〇・〇	九七、〇二五・九	
同上ニ對スル獎勵品種	三割二分、三	五割三分四四	

(八) 縣立農事試驗場

本場 東葛飾郡松戸町
水田部 同 郡葛飾村

一四二

沿革

明治四十一年十月東葛飾郡中山村に創設し試験事業は翌四十二年度より著手せり當時敷地及試験用地合計四町六反四畝八歩にして主として園藝作物の試験に従事したりしが明治四十四年度より同郡葛飾村に水田部を設け普通作物に對する各種の試験をも併せ行ふこととせり、其後大正二年十一月同郡松戸町に移轉し水田部のみは從來のまゝ繼續せり

現況

一、用地 本場 八町六反二畝 内建物敷地百八十七坪六合五勺五才

水田部 一町七反四畝十九歩 内建物敷地三十四坪五合

一、職員 場長 技師四名、技手二名、助手三名

一、事業 米麥、蔬菜、果樹及花卉に關する各種試験、二毛作に關する各種試験、病蟲害驅除豫防に關する試験、種苗の配布、講習、講話及實地指導、調査、質疑應答

(備考) 本縣水稻採種田に播種する種籽の育成配布は水田部に於ける主要の事業なり

一、經費 大正四年度に於ける經費豫算次の如し

俸給 三千七百六十圓

雜給 二千七百八十二圓

場費 二千五百四十六圓

修繕費 三十圓

合計 九千百十八圓

(二) 米穀検査所 千葉郡千葉町

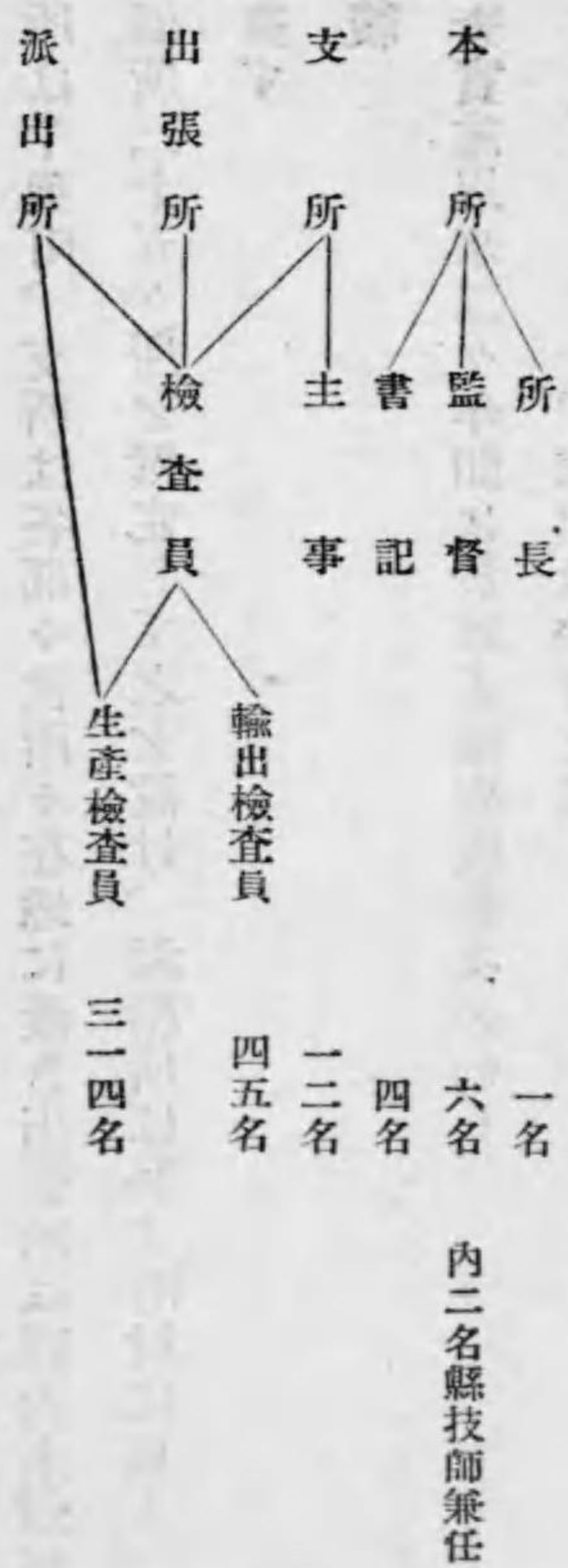
一四三

沿革

本縣に於ける米の産額は前述の如くにして其の中少なくとも年々五十萬石を輸出するの状況にあれども之を需用する京濱地方に於て聲價常に揚らず乾燥、調製、俵装並榊量等甚だ不整にして他府縣の輸出米に比し頗る遜色あり、之が改良に關しては指導獎勵を怠らざりしも更に米穀検査の必要を認め大正元年度に産米改良準備委員を設け又各町村に産米改良獎勵委員を囑託設置し各種準備に關する事務に當らしめ遂に大正二年三月米穀検査規則其他之に關する訓令、告示等を發布し同年九月一日より検査を実施するに至れり、検査は生産米に對する生産検査及輸出米に對する輸出検査の二種にして前者は縣内に於て受渡する玄米に就き之を行ひ合

格、不合格を定め更に合格米を甲、乙、丙に區別し後者は精米又は生産検査を受けたる玄米にして縣外に輸出するものに就き之を行ひ合格、不合格を定め更に合格米を一等より五等に區別せしむ

職員並組織



本所は千葉町、支所は各郡々役所々在地に置き出張所は縣内米穀集散地の主要なる個所三十五ヶ所を撰定して之を設け、派出所は縣下町村に亘り三百十八ヶ所を設置す

成績

検査實施以來二ヶ年間に於ける検査成績次の如し

一、輸出米検査成績

検査總俵數	検査等級					不合格	
	一等	二等	三等	四等	五等		
大正二年度 （自大正三年九月 至大正三年三月）	支米 四六五、九九九	一、二三三	二五、九一四	一一三、八三七	二二三、七七五	二一、八八九	六九、四五二
精米 四〇、二一六	三一	一、六四六	一七、〇八二	一八、六二三	六九一	二、一五三	
大正三年度 （自大正三年四月 至大正四年三月）	支米 一、三九八、五八五	九〇六	二九、四八五	二五六、二五四	六六五、六六八	三四一、一四七	一〇五、一二五
精米 一〇一、七八四	三〇	四、六八九	四三、三五五	四四、七六五	七、〇四一	一、九〇四	

二、生産検査成績

検査總俵數	検査等級					不合格
	甲	乙	丙	不合格		
大正二年度	水稲 二、二八五、〇六一	一六七、六九九	一、八九〇、七九六			二二六、五六六
陸稻 六四、八八四	一、七三二	四四、〇八一				一九、〇八一
計 三三、五一四	一	九、七四二				三三、七七一
大正三年度	水稲 二、四〇三、七八七	一〇	六、七一六			一三、六〇二
陸稻 二、九二四、一六二	一六九、四三二	一、九五一、三三五				二八三、〇二〇
計 八八、四〇〇	九九、七七三	二、〇六七、三一六				一八九、二三〇
大正三年度	水稲 一六、九一五	一、七六六	四二、七四二			一三、九八七
陸稻 二一、八二九	八	一、六一六	一、八三八			一、〇五八
計 三、〇五一、三〇六	一〇一、五五一	二、一三三、五二二	六〇九、三三〇			二二六、九一三

大正二年度以降經費豫算次の如し

大正二年 七六、九四八、〇〇〇 大正三年 六九、六〇〇、〇〇〇 大正四年 六九、三三五、〇〇〇

(ホ) 縣農會

沿・革

本縣農會は明治二十八年の創立に係り縣下各郡に亘る郡農會を以て組織す、翌二十九年縣令を以て農會規則の發布せらるゝや農會を縣農會、郡農會、町村農會の三種に區別し茲に始めて純然たる系統的團體を組織するに至り更に三十二年に至り農會法制定せられ又翌年農會令の發布あり次て三十八年再び農會令の改正を見るに及び系統的農會の組織益々完備し以て今日に及べり

現 況

現在農會は縣農會一、郡農會一二、町村農會三四七にして農事に關する諸般の指導獎勵に努め事業は多く之を系統的に行ひ創設以來施行したる事業中成績顯著なるもの亦少からず茲に今縣農會に於ける現今の施設經營の大要を示せば次の如し

- 一、技術員四名を常置し又臨時に講師、技術者を招聘し以て事業の執行に當らしむ
- 一、米麥作及堆肥競技會、各級農會系統的に各競技會を開催し技術の進歩を圖る
- 一、牛馬耕講習及競技會
- 一、町村農會役職員講習會
- 一、麥の品種改良、小麥品評會及小麥の共同販賣
- 一、堆肥舍組合設置獎勵、補助金を交付して堆肥舍建築組合の設立を獎勵す
- 一、蔬菜採種組合の獎勵、前同様補助金を交付す

- 一、農業資料巡回展覽會
- 一、農事調査
- 一、會報の發刊
- 一、其他各種技術上に關する實地指導、講習、講話及視察、質疑應答等

經費

最近五ヶ年間に於ける經費豫算次の如し

明治四十四年	一四、九五五、〇〇〇	大正三年	一三、〇五〇、〇〇〇
大正元年	一六、一五五、〇〇〇	同四年	一三、二五〇、〇〇〇
同二年	一二、七五〇、〇〇〇		

郡農會の經費豫算は大正四年度に於て總計參萬四千拾八圓貳拾八錢にして最も多きは四千貳百五拾圓、最も少きは千九百九拾貳圓參拾錢、平均一郡農會貳千八百

參拾四圓八拾五錢七厘に當れり

六、金融

金融機關としては農工銀行一、普通銀行五四、信用組合三二九及質屋一、一二二其他無盡、頼母子講等にして是等各種金融機關の大正三年度に於ける資本金、預金及貸付金等を示せば次の如し

農工銀行年度内貸付高	八四〇、二六〇円	(内代理貸付)	五二八、七五〇円
農工銀行貸付高年度末現在	四、二五四、四七九	(内代理貸付)	二、六二一、九一三円
普通銀行數	五三		
普通銀行資本金總額	八、三九八、七五〇円		
普通銀行預金總額	一三、六四五、一〇一		
普通銀行貸付金總額	一一、〇五五、九一三		

信用組合数 三二九
 信用組合貸出金總額 一、二八、八三二円
 信用組合貯金總額 四六四、三七〇
 質屋貸付金總額 一、〇一五、七六三

次に是等金融機關の農業に對する金融狀況を示さんとす

(イ) 農工銀行

大正三年十二月末日現在調査に依れば農工銀行、同代理貸付金使用者中農業に關係したる分次の如し

使用者別	農行銀行貸付金	同代理貸付金	使用者別	農行銀行貸付金	同代理貸付金
農業者	一、五五七、二二四円	一、二六三、二〇四円	産業組合	四、七〇〇	七八、四五四円
耕地整理	三八、一二七	四〇九、五八七	農業者二十人以上ノ組合	七、九八六	—
水利組合	一、九〇〇	—	合計	一、六〇九、九二七	一、七五〇、二四五

(ロ) 産業組合

本縣に於ける産業組合の設置は明治三十四年三月以降にして當時は未だ一般に産業組合制度徹底せず縣農會に於て専ら之か獎勵に努めたれども明治三十八年末に至りても尙僅に二十一組合を見るに過ぎざりき、其後大日本産業組合中央會千葉支會の設置せらるゝあり又縣に於ても指導獎勵に努め大正元年度よりは特に産業組合巡回教師を設置し講習、講話實地指導等を爲さしめ益々之が發達普及を圖りしを以て近時漸く隆盛に趨き組合數三百四十二に達し全國府縣の第九位を占むるに至れり

大正三年度末各郡別組合數左の如し

次に同年度末に於ける組合員數職業別を示せば左の如し

農業者 二八、二六八
 工業者 一、一六〇
 商業者 三、〇四七
 水産業者 六八六八
 林業者 三
 雑業者 一、三〇〇
 合計 三四、四一一人
 一五五

明治四十四年	同元年	大正二年	合計	香取	海上	匝瑳
一九一七	一九一七	一九一八	二〇二二	一八	四	八
六	五	六	六	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—
五三	六五	七〇	七〇	八	六	二二
七	七	六	六	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—
二五	三〇	三五	三六	—	九	一三
—	二	七	七	—	—	—
八	七	六	三	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	三	—	—	—
二二	二九	三三	三四	二〇	二四	五七

郡別	信用購買	販賣	生産	信、購	信、販	信、生	信、購、販	信、購、生	信、販、生	販、生、販	計
安房	二二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二八
夷隅	一三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一五
君津	五〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	五四
長生	七	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一七
山武	一六	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二七
市原	三四	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三九
千葉	五	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一三
東葛	七	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一四
印旛	一八	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三四

而して出資口數總數八萬四千八百五十三口にして一人平均二、五口に當り組合員を縣下全戸數に比較すれば約一割五歩なり、更に農業者のみに就きて之を見るに農家全戸數に對し組合員は約一割八歩に相當せり

次に事業の概況を示せば左の如し

貸付金(大正三年度末現在高) 一、二四四、九一九円
 野(金(同 上) 五三〇、九〇四
 大正三年度販賣額 五二九、一三〇円
 大正三年度使用料加工料 三、一二二
 大正三年度購買額 五八三、六五二

次に運轉資金は拂込濟出資金七五一、四六九圓、準備金特別積立金一五四、四〇八圓借入金借入額二八三、七二二圓及貯金受入額一、一四〇、八三六圓合計二、六三〇四三五圓にして大正三年度に於ける總剩餘金は七萬七千四百拾圓なり

左に明治四十四年以降に於ける剩餘金及組合員一人出資一口に對する剩餘金の變遷を示さんとす

年次	總剩餘金	組合員一人ニ對スル剩餘金	出資一口ニ對スル剩餘金	拂込濟出資金ニ對スル剩餘金歩合
明治四十四年	二九、七五七	一、五八一	六六四	九四八
大正元年	四五、三五四	一、八七三	七八七	一〇二九
同二年	六一、四〇九	一、八八六	七八〇	一〇二六
同三年	七七、一四〇	二、二四二	九〇九	一〇二六

(ハ) 金利

普通銀行に於ける預金貸金等に對する金利を平均するときは左の如し

定期預金	(百圓ニ付日歩平均)	一錢六厘六毛
當座預金	(同)	一錢一厘七毛
定期貸付金	(同)	三錢〇一毛
抵當付貸付金	(同)	二錢四厘六毛
無抵當貸付金	(同)	二錢五厘七毛
貯蓄預金	(同)	一錢三厘七毛

質屋の貸付金利次の如し

最高	十圓ニ付月利	一圓ニ付月利
最低	二十六錢一厘	三錢九厘
平均	十九錢四厘	二錢六厘
	二十二錢八厘	三錢三厘

(二) 貯金

銀行貯金及郵便貯金中農業者の貯金額最近五ヶ年間に於ける變遷を示せば次の如し

年次	銀行貯金		郵便貯金	
	人員	金額	人員	金額
明治四十二年 下半年	一七八六一	三〇三、六二一	五一、三〇五	四八四、五二八
同 四十三年	二〇、三四三	三六五、八九四	七七、二四〇	一〇、二五、二〇四
同 四十四年	二一、七三四	四三二、四九九	八九、四七四	一、四四一、五五七
大正元年	二二、九五二	五一、六六七	九五、三二一	一、六八三、四七八
同 二年	二四、八九八	五二、一一八	九七、九九九	一、七六一、二三四
同 三年	二五、九七六	五〇四、八七八	一〇二、四五四	一、八二七、五一四

而して一人平均貯金額を示せば次の如し

銀行貯金	明治四十二年 一六、九九八	明治四十三年 一七、九八六
郵便貯金	明治四十二年 九、四四六	明治四十三年 一三、二七三

一五九

明治四十四年 二〇、三四七
 大正元年 二二、二九三
 大正二年 二〇、九三〇
 同三年 一九、四三六
 一七、九七二
 一七、八三七

農家の貯金額は前述の如く漸次増進の傾向にして其貯金總額は全貯金額の銀行貯金に於て三割一分強郵便貯金に於て四割二分強を占む

七、肥料

(イ) 管内肥料製造高

本縣に於て製造する肥料の主要なるものは動物質肥料にして就中乾鱈及鱈搾粕を最とす、之れ本縣には古來鱈の漁場として著名なる九十九里沿海の存するが爲なり今管内肥料製造高最近五ヶ年間に於ける變遷を示せば次の如し

年次	動物質肥料	植物質肥料	礦物質肥料	調合肥料	雜肥料	合計
明治四十三年	一九九、四九〇	六三、七八四	一八五			二六三、四五九
同四十四年	本年度ハ調査セス					
大正元年	四四二、三六八	七〇、七七五	六、八二一			五一九、九六四
同二年	四八八、三五五	九七、六四一	二三、三七七	二二五	一〇	六〇九、四九八
同三年	五六八、五〇五	八一、一八四	三一、九四八	二五四	八八	六八一、九七九

前記の如く肥料は逐年著しく増加し特に礦物質肥料に於て其の甚しきを見るべし、之れ近時安房、夷隅二郡に於ける沃度製造業の盛況を來したるの結果其の副産物として産出するもの多きに因り將來益々増加すべし

大正三年度に於ける前記各種肥料に就き更に細別すれば次の如し
(イ) 動物質肥料

鯷 押 粕	六一九、四八三 圓	二四九、八八六 圓
秋刀魚メ 粕	六七	三二
直シ 魚 粕	九五八	三七一
乾 類	一、三三八、四二七	三二一、四五四
荒 粕	九、〇六七	二、五九五
魚 鱗 粕	三、四一五	三〇二
雜 魚 粕	二二〇	五八

魚肥類中最も多きは乾鯷にして安房、夷隅、長生、山武、匝瑺、海上の各郡に産出し殊に其の大部分は夷隅郡に於て製造せらる次に鯷搾粕にして是又前記各郡に

於て多少産出せらるれども其の最も多量に製造せらるゝは海上郡なりとす

骨 肥 類	鯨 肉 骨	六五〇 圓	一三〇 圓
其 他	子 鮫 粕	八〇〇	二〇〇
	蟹 手 粕	一一、六三九	二、九七七
		四、九七五	四八二
		一〇八	一八

(ロ) 植物質肥料

菜種油粕	二八二、二〇八 圓	桐實油粕	一三、五八一 圓
胡麻油粕	四八、一八三	蓖麻子油粕	八〇〇
落花生油粕	二〇、八三二	椿實油粕	五四
荳油粕	五、四四八	大豆粕粉末	四、九〇〇
			一〇、五〇

油粕類中最も多きは菜種油粕にして胡麻油粕之に亞き菜種油粕は縣下各郡に於て

産出せらるれども其主産地は海上郡市原郡及千葉郡にして殊に前二郡に多く全産出額の五割八分強に當れり、胡麻油粕は殆ど其全部を千葉郡に於て産出し落花生油粕は産額未だ多からずと雖、本縣に於ける特産品にして専ら山武郡海上郡匝瑳郡の産出に係り海上郡最も多し

(ハ) 礦物質肥料

磷酸質肥料	骨灰	三六六	一三二
加里質肥料	加里鹽類	一三一、六一三	三、八二六

骨灰の産出せらるゝは東葛飾郡にして加里鹽類は安房郡、夷隅郡に限られ、而して加里鹽類としては鹽化加里及硫酸加里の二種にして何れも沃度製造の副産物と

して産出せらるゝものなり

(ニ) 調合肥料

配合肥料	八〇〇	二五四
------	-----	-----

(ホ) 雜質肥料

掃寄酸曹肥料	四〇〇	三二
塵芥灰	二、〇〇〇	五六

(ロ) 肥料消費額

農家に於ける肥料消費額は其の調査頗る困難にして未だ正確なる統計を有せざれども左に大正三年度に於ける管内農家の購入消費せる肥料價格を推算し其の概要を示さんとす

肥料名	價格	備考
人造肥料	四五四、四五五	過磷酸石灰、完全肥料、硫酸安母尼亞、其他
植物質肥料	一、〇〇四、三七三	大豆粕、米糠、油粕其他
動物質肥料	七六九、七五九	魚肥、尿尿類
雜質肥料	七〇、〇〇〇	塵芥、牛尿其他
合計	二、二九八、五八七	
右の内縣外より購入せる分	一、四八三、八四四	
縣内産出のものを購入せる分	八一四、七四三	

前記購入肥料を農家一戸に對する時は拾四圓五拾六錢強に當り之を耕地一反歩に對する時は壹圓貳拾六錢強に當れり

八、農家副業

本縣に於ける農家の副業は其種類頗る多數にして養蠶、養鶏、養豚、果樹、蔬菜

等は其の最も主要なるものなれども、養蠶、養鶏、養豚等に對しては別に記述せらるべく又果樹、蔬菜等は前既に記述せしを以て今茲には家庭に於ける工業的副業のみに就き述べんとす

(イ) 澱粉

本縣に於ける澱粉製造は既に家庭的工業の域を脱し純然たる工場組織の製造業に進みたるを以て之を農家の副業と見做すこと能はざるべきも本業の如きは從來本縣に於ける特殊の産業にして然かも之が原料の供給上農家に密接なる關係を有するを以て左に其の概況を述べんとす

澱粉の製造最も盛なるは千葉郡及海上郡にして殊に前者は其の起源古く從來本縣

の澱粉として市場に名聲を博したるは主として本郡蘇我町附近の産出に係るものなりとす今最近に於ける澱粉製造高を示せば次の如し

年次	甘藷澱粉		馬鈴薯澱粉		寒晒粉		合計	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格
明治四十二年	七三六、五六四 <small>斤</small>	二四六、九五八 <small>円</small>	一〇七、六六五 <small>斤</small>	四八、三八九 <small>円</small>	一五、六〇〇 <small>斤</small>	八、七七五 <small>円</small>	八五九、八二九 <small>斤</small>	三〇四、一二三 <small>円</small>
同 四十三年	八二〇、二一二 <small>斤</small>	二七六、七四二 <small>円</small>	一一五、九四〇 <small>斤</small>	五〇、七九六 <small>円</small>	一五、一三六 <small>斤</small>	八、一三九 <small>円</small>	九五一、二八八 <small>斤</small>	三三五、六七七 <small>円</small>
同 四十四年	六、七七九、九七六 <small>斤</small>	三五七、七一九 <small>円</small>	八〇三、五七三 <small>斤</small>	五五、五一七 <small>円</small>	九六、五五〇 <small>斤</small>	八、三一五 <small>円</small>	七、六八〇、〇九九 <small>斤</small>	四二一、五五一 <small>円</small>
大正元年	八、七二九、一七三 <small>斤</small>	五三二、〇九〇 <small>円</small>	七三三、四〇七 <small>斤</small>	五一、〇八〇 <small>円</small>	八九、六五〇 <small>斤</small>	七、三三九 <small>円</small>	九、五五二、二三〇 <small>斤</small>	五九〇、五〇九 <small>円</small>
同 二年	八、六六〇、五五四 <small>斤</small>	四四九、八六五 <small>円</small>	五二五、八八五 <small>斤</small>	三六、一〇八 <small>円</small>	七五、七五〇 <small>斤</small>	六、四四七 <small>円</small>	九、二六二、一八九 <small>斤</small>	四九二、四二〇 <small>円</small>
同 三年	九、九二九、五九二 <small>斤</small>	三七〇、五八〇 <small>円</small>	三〇八、九六八 <small>斤</small>	一六、四二八 <small>円</small>	二三、一〇〇 <small>斤</small>	三、三六〇 <small>円</small>	一〇、二六一、六六〇 <small>斤</small>	三九〇、三六八 <small>円</small>

大正二年に於ける製造戸數は二百四十六戸にして其の職工男女合計一千七百十人を算すれども中半數は千葉郡にして即ち戸數百二十六戸を有し海上郡の六十七戸之に亞ぐ

(口) 藁製品

藁製品中最も多きは蒔刈及繩にして草履、草鞋等之に亞ぎ其の産額は逐年増加しつゝあり今最近五ヶ年間の藁製品價格を示せば次の如し

明治四十三年	五四〇、三〇九 <small>円</small>	大正二年	八四九、〇四七 <small>円</small>
同 四十四年	七三一、三四三 <small>円</small>	同 三年	六五六、五九八 <small>円</small>
大正元年	八〇九、八二六 <small>円</small>		

右の中産額の多きは長生郡及市原郡にして夷隅郡之に亞げり殊に長生郡に於ける

吠、菘等は從來より其の名高く京濱地方に販出せられ所謂應南吠と稱せらるゝもの是れなり蓋し長生郡應南町附近は夙に本業の隆盛を見たる所にして其後漸次四周に波及し隣接せる市原、夷隅兩郡の如き遂に今日の状況を見るに至れり而して之が需要は主として京濱地方に於ける肥料製造會社にして縣下吠の輸出額は一ヶ年七百萬枚以上に達せり

(ハ) 壘表、莫産類

産額多からずと雖安房、夷隅兩郡に於ては農家の副業として重要な位置を占めつゝあり、即ち縣下總産額の約七割を安房郡に於て二割五分を夷隅郡に於て産出せり今最近五ヶ年間に於ける生産額の變遷を示せば次の如し

明治四十三年	三二、四一八円	大正二年	三四、四五一円
同 四十四年	四一、七四五	同 三年	二八、四九三
大正元年	四〇、三六二		

(ニ) 大根切干

生産額年々三十七萬貫内外價格八九萬圓にして内海外に輸出せらるゝもの約四萬圓なりとす而して各郡共多少は産出せらるれども其の大部分は東葛飾郡にして約八萬圓に上り特に同郡南部八榮村、葛飾村、鎌ヶ谷村、法典村、中山村、高木村等を以て主産地となす

其他甘藷切干、牛蒡乾燥の如きものあれども産額極めて少し

(ホ) 楊子 (房楊子、小楊子等)

産額僅に五千圓内外なりと雖其の大部分は君津郡久留里町附近にして約四千五六百圓に上り同地方に於ては主要なる副業たり主として京濱地方に移出す

(へ) 團扇骨

安房郡に於ける特産にして年額貳萬圓以上主として同郡那古町、蟻町及豊田村等より産出せらる

(ト) 箆、籠類

本品は家具用、農商工業用、漁業用、養蠶用等に使用せらるゝものにして其の産額七八萬圓に達するも特に之が主産地と目すべき所なく殆ど各地に於て産出せられ且つ多く縣内に於ける需要を満すに過ぎざるなり

(チ) 箕

主産地は匝瑳郡豊榮村にして年額貳萬貳千圓以上に上り同地方に於ける主要なる副業なり

(リ) 菅 笠

年産額壹萬貳參千圓にして長生郡最も多く壹萬貳千圓に近く殆ど其の全部を占め同郡五郷村、豊榮村、鶴枝村、應南町等を主産地とす

(又) 藍 玉

年産額六千圓内外にして東葛飾郡最も多く四千圓に達す
其他地方に依り特殊の副業尠からざれども何れも産額多からず僅々數千圓に過ぎ

しるを以て特に之を記述せず

一七四

大正五年三月二十八日印刷
大正五年三月三十一日發行

編纂者 千葉縣内務部

印刷者

東京市京橋區高代町四番地

高

島

幸

三

郎

電話京橋 一五四七番
振替東京 一一七二三番

印刷所

東京市京橋區高代町四番地

高

島

活

版

所

339
876



終

